

第5章 中世大友府内町跡第80次調査

第1節 調査の概要

調査期間
平成19年
(2007)
5月31日～
平成20年
(2008)
2月25日

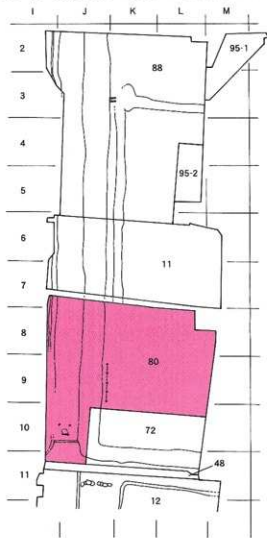
調査面積
約870㎡

本章で報告する中世大友府内町跡第80次調査は、一般国道10号拡幅事業に伴い国土交通省大分河川国道事務所からの委託を受けて実施したもので、平成19年(2007)5月31日から平成20年(2008)2月25日までの約10ヶ月間、発掘調査を行った。発掘調査面積は約870㎡である。

本調査区は、平成13年(2000)度に調査を実施した第11次調査区の南側に位置する調査区で、発掘調査開始以前には駐車場として利用されていた。平成18年度(2006)には当該地点の一部を第72次調査として発掘調査を実施した(本書第4章参照)。第72次調査の終盤で、国土交通省と協議を行い、発掘調査付近では国道建設工事が直ちに行われないことが確認されたため、第72次調査区については埋め戻しを行わず、新年度(平成19年度)になってから第72次調査区の北側と西側を拡張する形で発掘調査を実施することを計画した。この平成19年度の発掘調査地点が、第80次調査に相当する(第228図)。

発掘調査は平成19年(2007)5月31日から表土剥ぎを開始し、6月6日からは作業員を本格的に投入して、発掘調査に着手した。調査区からは「第2南北街路」と呼称する中世府内のメインストリートである街路遺構や堀・溝・土坑・井戸等が多数検出され、また部分的には複数の遺構面を確認するなど、遺構密度が極めて高いことが判明した。また、16世紀末葉に掘削された堀SD101の内部からは、多量の土器陶磁器類とともに、瓦類や木製品、貝類や動物遺存体などの自然遺物も数多く出土し、それらの記録や取り上げに多くの時間を要することとなった。しかしながら、発掘支援業者の適切な現場の差配と熟練した作業員の協力もあり、発掘調査全般はおおむね順調に進行したといつてよい。ラジコンヘリによる空中写真撮影は、16世紀末葉以降の遺構群・16世紀後葉までの遺構群・完掘後の3段階に分けて実施した。また、3度目の空撮後に若干の時間的な余裕が生じたため、調査区東壁トレンチで出土した古代(奈良・平安時代)の遺物集中部の広がりを検討するため、最終確認ための面下げを実施することもできた。

平成20年(2008)2月18日からは調査で用いた土嚢袋などの解体と調査区の埋め戻しを開始し、22日には埋め戻しをほぼ終了した。そして、2月25日には現場を撤収し、現地でのすべての作業を終了した。



第228図 調査区位置図(1/800)
※数字は調査回数

第2節 調査の概要

1. 遺構の概要と基本層序

時宗寺院
「称名寺」

中世大友府内町跡第72次調査区は1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、豊後府内で第2の規模を誇る時宗寺院「称名寺」の領域に相当し、これまで実施されてきた周辺地域の調査実績からも、称名寺に関わる遺構・遺物が存在することが想定されていた。

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土産標(旧日本測地系)に乗せた10m方眼で区画している。それぞれの区画には西から東へJ～M、北から南へ1～78の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている(例えばJ10区など)。本章で報告する80次調査は、東西I～M区、南北7～11区に相当する(第228図)。

基本層序

本調査区周辺は、発掘調査以前にはアスファルト敷きの駐車場として利用されており、アスファルトの下位には細かい砕石で構成される近年の客土が約1.1～1.2mの厚さで置かれていた。客土の下位には、近世以降と推定される旧表土(耕作土)や旧水田床土が約10～20cmほど堆積している。客土と旧表土および旧水田床土の一部については大型重機で掘削・除去を行い、それより下位は人力による掘削を行った。

人力掘削ではカキ板・ネジリガマ・移植ゴテ等を使用して、数cmから5cm前後の一定深度で掘り下げを数回繰り返して、掘り下げた面をきれいにしながら、併行して遺構検出を行った。その結果、調査区南東側のL9～M9区付近では、標高4.4m前後で地山である明茶褐色粘質土が現れ、色調の違いから、柱・土坑・井戸と推定される遺構埋土の上面プランが検出できた。ところが、それ以外の地点では地山が明瞭に確認できず、部分的あるいは一定範囲にわたって広がっている整地層の上面から遺構が切り込んでいることが想定できた。

また、遺構が複雑に切り合っていると想定された調査区西側では調査区の10mグリットごとに土層観察用の東西パレットを残して、サブトレンチによる掘り下げ所見から、遺構の深度や切り合い関係を想定・確認した上で、平面的な掘り下げを行った。

天正14年
(1586)
の焼土層

後に第2南北街路の一部であることが判明するJ10～J11区付近では、天正14年(1586)の島津侵攻時に形成されたと想定される焼土層が良好な形で検出された。この焼土層は「大規模施設段階」の堀であるSD101に流れ込んでいることも判明し、発掘調査の前段階では、この焼土層をキー・パレットにして、焼土層形成以前と以後に遺構群が大別できることも想定できた。

堀SD101

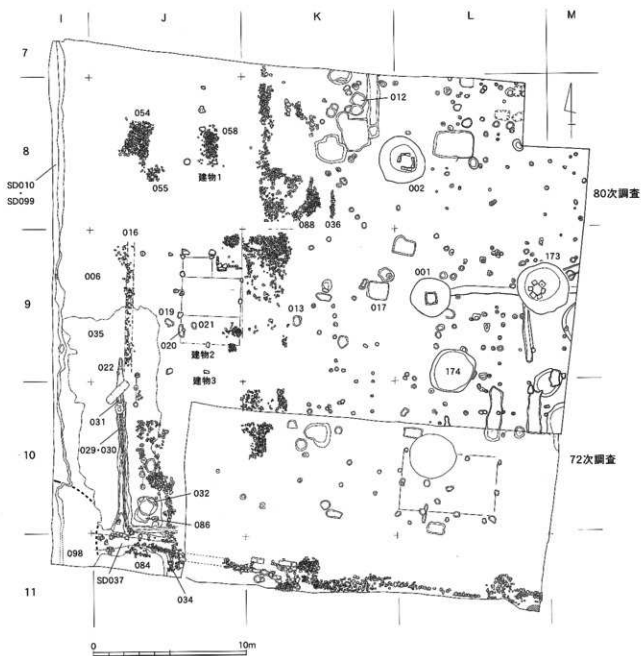
発掘調査が進行するにつれて、16世紀末葉に掘削された堀SD101からは、多種多量な遺物が出土するようになり、その中には多量の土器・陶磁器・瓦の他に、動物遺存体や貝類・木製品など特殊な遺物も数多く認められるようになった。中でも特に注目すべきものは、中国明時代に製作された鎗金唐枕で、木材と漆を使用し、「鎗金」という漆の装飾技法で飾られた調度品は特に注目される。また、動物遺存体にはウシやブタなどが多く認められ、当時の日本列島の一般的な食生活にはなじみの少ない食物が多数利用されていたことが判明した。これらの食物を利用し、生活廃棄物として堀に廃棄したのは、第2南北街路を挟んで堀の西側に展開する「唐人町」に居住する住民たちであったと推定される。

鎗金唐枕

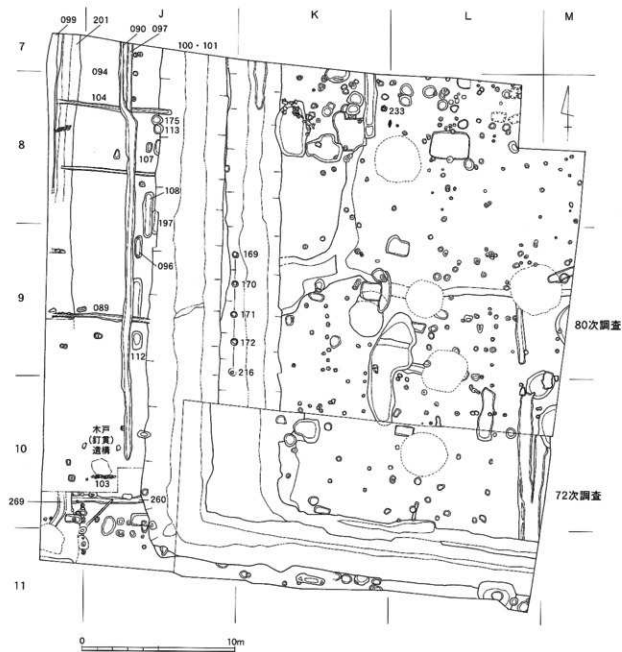
動物遺存体
ウシやブタ空堀
SD200

さらに、多量の瓦が出土していることから、調査地点付近にかつて寺院が存在していたことが確実視される。称名寺が調査地点付近に位置していた時期にも、寺域を区画する空堀(SD200)が構築されていたことが判明した。

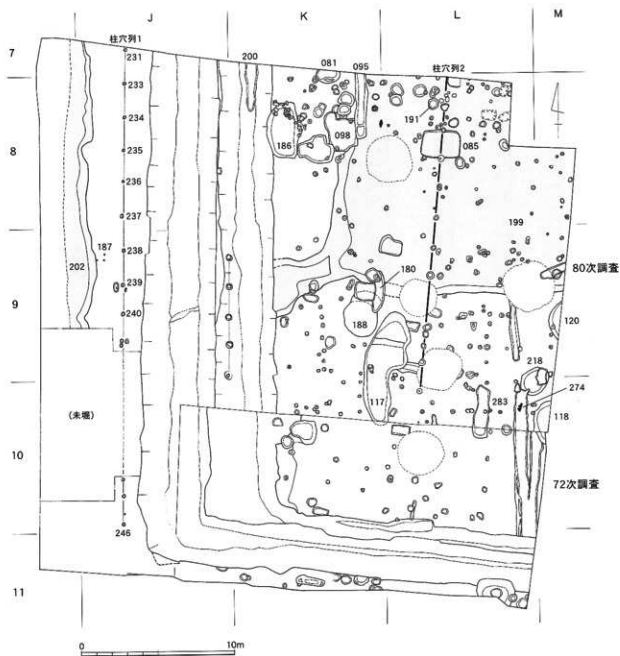
焼土層以前の遺構群をすべて発掘し、発掘調査が終盤に至ると、出土遺物の一部に古代(奈良・平安時代)の所産と考えられるものが混入しており、これまで地山と考えてきた黄褐色粘質土の一部に中世以前の遺物が含まれている可能性が考えられるようになった。このことを解決すべく、調査区の



第229図 遺構配置図① (町屋段階 1/250)
※数字は遺構番号



第230図 遺構配置図②(大規模施設段階 1/250)
 ※数字は遺構番号



第231図 遺構配置図③ (寺院段階・古代 1/250)
 ※数字は遺構番号

第8表 中世大友府内町跡第80次調査遺構一覧(1)

遺構番号	田遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD001	S001	井戸	L9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		266
SF002	S002	井戸	L8区	「町屋」段階(1587～1600年代)		268
SP003	S003	柱穴	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)	埋土に焼土を多量に含む。	244
SP004	S004	柱穴	J10区	「町屋」段階(1587～1600年代)	埋土に焼土を多量に含む。 SP003-004-015で柱穴列を形成。	244
S005	S005	掘削	J10区		掘土層(SX084-085)より、上段の第2南北路。	227
SP006	S006	井戸(井戸跡を有)	I7～J11区	「町屋」段階(1587～1600年代)		247
SP007	S007	柱穴	K10区	「町屋」段階(1587～1600年代)		245
SK008	S008	土坑	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代)	埋土に焼土・瓦片を多量に含む。	245
SK009	S009	土坑	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SD010	S010	街路側溝	I7～I9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		232
SP011	S011	柱穴	K8区	「町屋」段階(1587～1600年代)	SK012を切る(SK012-SF011)。	
SK012	S012	土坑	K8区	「町屋」段階(1587～1600年代)	2基の土坑が重複。	247
SK013	S013	土坑	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		247
SK014	S014	土坑	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		248
SP015	S015	柱穴		「町屋」段階(1587～1600年代)	埋土に焼土を多量に含む。 SP003-004-015で柱穴列を形成。	244
SD016	S016	街路側溝	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		234
SK017	S017	土坑	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SP018	S018	柱穴	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SK019	S019	土坑	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		248
SK020	S020	土坑	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		248
SK021	S021	土坑	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		248
SD022	S022	街路側溝	J9-I9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		236
SP023	S023	柱穴	J10区	「町屋」段階(1587～1600年代)	横土層(SX085)を切る。	244
SP024	S024	柱穴	J10区	「町屋」段階(1587～1600年代)	SP023-025で柱穴列を形成。	244
SP025	S025	柱穴	J10区	「町屋」段階(1587～1600年代)	SP023-025で柱穴列を形成。	244
SP026	S026	街路	J11区	「町屋」段階(1587～1600年代)以降	石組側溝SD034の上位に分布する瓦敷き道路	239
SP027	S027	街路	J11区	「町屋」段階(1587～1600年代)以降	石組側溝SD034の上位に分布する瓦敷き道路	239
SP028	S028	街路	J11区	「町屋」段階(1587～1600年代)以降	石組側溝SD034の上位に分布する瓦敷き道路	239
SP029	S029	街路側溝	J10区	「町屋」段階(1587～1600年代)	SP029-030	236
SD030	S030	街路側溝	J10区	「町屋」段階(1587～1600年代)	SP029-030	236
SD031	S031	街路側溝	J10区	「町屋」段階(1587～1600年代)	SP029-030	236
SK032	S032	土坑	J10区	「町屋」段階(1587～1600年代)	SD022の一部か。 切っ合・関係K032-SK086 焼土層SX084-085を切る。埋土には 焼土を含む。	260
SK033	S033	土坑	J10区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SD034	S034	石組側溝	J11区	「町屋」段階(1587～1600年代)	横土層(SX084-085)を切る。	238
SD035	S035	街路側溝	J11区	「町屋」段階(1587～1600年代)	横土層(SX084-085)を切る。 名ヶ小路北側溝。	236
SX036	S036	石列	K8区	「町屋」段階(1587～1600年代)	性別不明。	263
SD037	S037	道路側溝	J11区	「町屋」段階(1587～1600年代)	横土層(SX084-085)を切る。 名ヶ小路北側溝。	236
SX038	S038	遺物集中部	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		251
SX039	S039	遺物集中部	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		251
SX040	S040	遺物集中部	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		251
SX041	S041	遺物集中部	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		251
SX042	S042	遺物集中部	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)	京都系土師器がまとまって出土。	262
SK043	S043	土坑	K9～L9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SP044	S044	柱穴	L9区	「町屋」段階(1587～1600年代) ?		
SK045	S045	土坑	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SP046	S046	柱穴	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代) ?		
SP047	S047	柱穴	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代) ?		
SP048	S048	柱穴	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代) ?		
SP049	S049	柱穴	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代) ?		
SP050	S050	柱穴	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代) ?		
SP051	S051	柱穴	K10区	「町屋」段階(1587～1600年代) ?		
SK052	S052	土坑	K9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SX053	S053	遺物集中部	J9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SX054	S054	集石遺構	J8区	「町屋」段階(1587～1600年代)	鎌倉種物産石製の瓦を主体とした遺物集中部。	261
SX055	S055	集石遺構	J8区	「町屋」段階(1587～1600年代)		262
SP056	S056	柱穴	L8区	「町屋」段階(1587～1600年代) ?		
SP057	S057	柱穴	L8区	「寺院(釈名寺)段階(14～15世紀)		
SK058	S058	遺物集中部	L8区	「町屋」段階(1587～1600年代)		242
SK059	S059	土坑	L8区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SP060	S060	柱穴	L8区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP061	S061	柱穴	L8区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP062	S062	柱穴	L8区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP063	S063	柱穴	L8区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP064	S064	柱穴	L8区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP065	S065	柱穴	L8区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP066	S066	柱穴	L8区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP067	S067	柱穴	L8区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP068	S068	柱穴	L9区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP069	S069	柱穴	L9区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。 柱穴列を形成。	
SP070	S070	柱穴	L9区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	

第9表 中世大友府内町跡第80次調査遺構一覧②

遺構番号	遺構番号	遺構の名称	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SP071	S071	柱穴	K9区	「寺院(称名寺)」段階(14~15世紀)	柱穴列を形成	
SP072	S072	柱穴	L10区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP073	S073	柱穴	L10区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP074	S074	柱穴	K8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP075	S075	柱穴	K8区	「町屋」段階(1587~1600年代)		
SP076	S076	柱穴	K8区	「町屋」段階(1587~1600年代)?		
SP077	S077	柱穴	K8区	「町屋」段階(1587~1600年代)?		
SK078	S078	土坑	J9区	「町屋」段階(1587~1600年代)	礎石建築物の土坑	252
SK079	S079	土坑	J9区	「町屋」段階(1587~1600年代)	礎石建築物の土坑	252
SK080	S080	古瓦	J9区	「町屋」段階(1587~1600年代)	礎石建築物付属する古瓦。	408
SK081	S081	土坑	K7~K8区	「寺院(称名寺)」段階(15世紀?)		
SP082	S082	柱穴	K8区	「町屋」段階(1587~1600年代)?		
SK083	S083	土坑	L8区	「寺院(称名寺)」段階(15世紀?)		409
SK084	S084	焼土層	J11区	「町屋」段階(1587~1600年代)	天正14年(1586)焼土層	277
SK085	S085	焼土層	J9~J11区	「町屋」段階(1587~1600年代)	天正14年(1586)焼土層 切り合い「階段」K032~SK086	277
SK086	S086	土坑	J10区	「町屋」段階(1587~1600年代)	焼土層SK084を切っており、埋土に焼土を含む。	250
SK087	S087	堆積層	J9~J10区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	埋土100~111に埋没する埋積層の一面。 天正14年(1586)より下層。	321
SK088	S088	石列	K8区	「町屋」段階(1587~1600年代)	石性不明	263
SK089	S089	溝渠	J9区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		316
SD090	S090	街路側溝	J7~J8区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	埋土は土で形成。天正14年(1586)直前の第2期南北街路に併走する埋積層。	311
SD091	S091	街路側溝	J8~J10区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	埋土は土で形成。天正14年(1586)直前の第2期南北街路に併走する埋積層。	311
SP092	S092	柱穴	J9区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	焼土層(SK085)下位で検出。 埋土は焼土で形成。 上面に礫あり。	
SP093	S093	柱穴	J9区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	埋土層(SK085)下位で検出。 埋土は土で形成。	
SP094	S094	溝渠(埋没状態不明)	J7~J10区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	天正14年(1586)直前の第2期南北街路。	
SD095	S095	溝渠	K7~K8区	「寺院(称名寺)」段階(16世紀前半~中葉)		404
SK096	S096	土坑	J9区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		397
SD097	S097	街路側溝	J7~J8区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	天正14年(1586)直前の道路跡で確認 「群芳花園」あり。	311
SK098	S098	土坑	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14~15世紀?)		409
SD099	S099	街路側溝	J7~J8区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		234
SD100	S100	溝渠	J7~J10区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		321
SD101	S101	堀	J7~J10区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		321
SK102	S102	石列	J8~J8区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		316
SK103	S103	石列	J10区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		316
SK104	S104	溝渠	J8区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		316
SP105	S105	柱穴	J10区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	方形溝渠・柱穴跡(内部)共存 焼土層(SK085)下位で検出。	
SK106	S106	土坑	J10~J11区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	埋土は土で形成。 第2期南北街路に覆り込まれた土坑。	397
SK107	S107	土坑	J8区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	第2期南北街路に覆り込まれた土坑。	397
SK108	S108	土坑	J9区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		
SP109	S109	溝渠	J11~J11区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	石土小溝 表示可能な出土遺物がなく、時期不明。 第2期南北街路に覆り込まれた土坑。	399
SP110	S110	柱穴	J11区	不明	SD099に切られる。	
SK111	S111	土坑	J9区	「大規模施設」段階(1570~1586年)	第2期南北街路に覆り込まれた土坑。 内部に礫を含む。	399
SK112	S112	土坑	J9区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		399
SK113	S113	土坑	J8区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		397
SK114	S114	土坑	J10区	「大規模施設」段階(1570~1586年)		
SP115	S115	柱穴	J10区	「町屋」段階(1587~1600年代)?		
SP116	S116	柱穴	J10区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP117	S117	柱穴	J11区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK118	S118	土坑	L10~M10区	「寺院(称名寺)」段階(15世紀後半)		416
SD119	S119	溝渠	L9区	井戸跡(13世紀後半~14世紀前半)に由来する 「堀」に覆り込まれた土坑跡(埋没不明)。		
SE120	S120	井戸	M9区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀)		411
SD121	S121	溝渠	M9区	不明	近畿か? 表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP122	S122	柱穴	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SI23	S123	礎石	L8区	不明		
SP124	S124	柱穴	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP125	S125					
SP126	S126	柱穴	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK127	S127	土坑	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK128	S128	土坑	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP129	S129	柱穴	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK130	S130	土坑	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP131	S131	柱穴	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP132	S132	柱穴	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP133	S133	柱穴	M8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP134	S134	柱穴	M8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP135	S135	柱穴	M8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP136	S136	柱穴	M8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP137	S137	柱穴	M8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP138	S138	柱穴	M8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP139	S139	柱穴	M8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP140	S140	柱穴	L8区	不明	表示可能な出土遺物がなく、時期不明。	

第10表 中世大友府内町跡第80次調査遺構一覧③

遺構番号	出遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SK141	S141	土坑	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP142	S142	柱穴	M9区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK143	S143	土坑	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP144	S144	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP145	S145	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP146	S146	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP147	S147	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK148	S148	土坑	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP149	S149	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP150	S150	柱穴	L10区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK151	S151	土坑	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP152	S152	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP153	S153	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP154	S154	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP155	S155	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP156	S156	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK157	S157	土坑	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK158	S158	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP159	S159	柱穴	L9K	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP160	S160	柱穴	L10区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP161	S161	柱穴	L10区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP162	S162	柱穴	L10区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP163	S163	柱穴	M9区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP164	S164	柱穴	L8区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP165	S165	柱穴	L8区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
	S166				欠番	
	S167				欠番	
	S168				欠番	
SP169	S169	柱穴		「大規模施設」段階(1570～1586年)	柱穴列を形成。礎盤(柱穴内礎石)を有する。	399
SP170	S170	柱穴		「大規模施設」段階(1570～1586年)	柱穴列を形成。礎盤(柱穴内礎石)を有する。	399
SP171	S171	柱穴		「大規模施設」段階(1570～1586年)	柱穴列を形成。礎盤(柱穴内礎石)を有する。	399
SP172	S172	柱穴		「大規模施設」段階(1570～1586年)	柱穴列を形成。礎盤(柱穴内礎石)を有する。	399
SE173	S173	井戸	L9～M9区	「町屋」段階(1587～1600年代)		273
SK174	S174	土坑	L9～M9区	「町屋」段階(1587～1601年代)		256
SK175	S175	土坑	J8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	397
SP176	S176	柱穴	J8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)	礎盤を有する。礎盤(柱穴内礎石)が2段となる。	311
SK177	S177	土坑	K9～L10区	「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)	土取りの遺構?	417
SP178	S178	柱穴	L8区	不明		
SP179	S179	柱穴	L8区	「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)	柱穴列2を形成。SK083(15世紀)に切られる。	
SK180	S180	土坑	K9～L9区	「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)		410
SP181	S181	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)	SK098(14～15世紀)に切られる。 提示可能な出土遺物がない。	
SX182	S182	不明	L10区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP183	S183	柱穴	L8区	「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)	柱穴列2を形成。SK083(15世紀)に切られる。	414
SK184	S184	不明	M9～M10区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP185	S185	柱穴	L10区	不明	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK186	S186	土坑	K8区	「寺院(称名寺)」段階(15世紀末～16世紀初頭)		407
SX187	S187	遺物集中部	J8区	「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)	第2南北路跡を後に検出。	419
SE188	S188	井戸	K9区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀)		412
SP189	S189	柱穴	L8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)?	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK190	S190	土坑	J8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)?	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK191	S191	土坑	L8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)?	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	411
SK192	S192	土坑	J8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)?	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK193	S193	土坑	L8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)?	提示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK194	S194	土坑	J8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)	第2南北路跡に彫り込まれた土坑。	397
SK195	S195	土坑	J7～J8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)	第2南北路跡に彫り込まれた土坑。	
SK196	S196	土坑	J8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)	第2南北路跡に彫り込まれた土坑。	
SK197	S197	土坑	J8区	「大規模施設」段階(1570～1586年)	第2南北路跡に彫り込まれた土坑。	397
SK198	S198	土坑	11区	「町屋」段階(1587～1600年代)		
SX199	S199	塼地層	K9～M8区	「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)		418
SD200	S200	塼	J7～J10区	「寺院(称名寺)」段階(15世紀中葉～後葉)	称名寺西側の塼?	402
SD201	S201	塼?	J7～J9区	「大規模施設」段階(1570～1586年)	「善人町」東側の塼?	315
SX202	S202	不明	J7～J9K	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)		415
SF203	S203	柱穴		不明		
SK204	S204	柱穴	K9区		提示可能な出土遺物がなく、時期不明。 井戸SE188(14世紀)に切られる。	418
	S205	土坑				
	S206	欠番				
	S207	柱穴		「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)	柱穴列2を形成。	414
SF207	S208	欠番				
	S209	欠番				
	S210	欠番				

第11表 中世大友府内町跡第80次調査遺構一覽④

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
	S211	欠番				
	S212	欠番				
	S213	欠番				
SD214	S214	溝?		不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP216	S216	柱穴		「大規模施設」段階(1570～1586年)?	SP189～172に柱穴跡を形成、遺構(柱穴内埋戻)を有する。	
SP217	S217	柱穴	II0区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK218	S218	土坑	L9～M10区	古代(奈良・平安時代)		421
	S219	欠番				
	S220	欠番				
SP221	S221	柱穴		「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)		
	S222	欠番			柱穴列を形成、 SK174(16世紀末～17世紀初葉)に知られる。	
SK223	S223	配石遺構	K7～K8区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明、 南北街道にパツクされる。遺物僅少。	
SK224	S224	土坑		14～15世紀?		
SK225	S225	土坑		不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP226	S226	柱穴	II0～J10区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列2を形成。	414
SP227	S227	柱穴	II0～J10区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
	S228	欠番				
SP229	S229	柱穴	II0区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明、 柱穴列1を形成。	413
SP231	S231	柱穴	J7区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP232	S232	柱穴		不明		
SP233	S233	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP234	S234	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP235	S235	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP236	S236	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP237	S237	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP238	S238	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP239	S239	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP240	S240	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP241	S241	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP242	S242	柱穴	K8区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～15世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP243	S243	柱穴	J10区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～16世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP244	S244	柱穴	J10区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～17世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP245	S245	柱穴	J10区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～18世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
SP246	S246	柱穴	J10区	「寺院(称名寺)」段階(14世紀後半～19世紀前半)	柱穴列1を形成。	413
	S247	欠番				
	S248	欠番				
	S249	欠番				
	S250	欠番				
SK251	S251	集石遺構		不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。 築造層は19世紀末。	
	S252	欠番				
	S253	欠番				
SP254	S254	柱穴	J10区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP255	S255	柱穴	II0～J10区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
	S256	欠番				
SP257	S257	柱穴	J10区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK258	S258	土坑	J10区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SP259	S259	柱穴	J10区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。 名々小路北側溝か?	318
SD260	S260	溝	J10区	不明		
SP261	S261	柱穴	J10区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
	S262	欠番				
SP263	S263	柱穴	II0～J10区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
	S264	欠番				
	S265	欠番				
SP266	S266	柱穴		不明	柱穴列を形成。	
SP267	S267	柱穴		「寺院(称名寺)」段階(14～15世紀)	柱穴列2を形成。	414
SP268	S268	柱穴		不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。 遺構を有する。	
SD269	S269	溝		「寺院(称名寺)」段階?(16世紀後半)		
SK270	S270	土坑	II0区	不明		
SP271	S271	柱穴	II0～J10区	不明	図示可能な出土遺物がなく、時期不明。	
SK274	S274	遺物集中部	L9区	古代(奈良・平安時代)		421
SK283	S283	柱穴状の跡み	L9区	古代(奈良・平安時代)		
SK300	S300	包含層		古代(奈良・平安時代)	遺物を少量含む包含層。	285
		近世遺地層 水戸町遺構				319

古代(奈良・平安時代)の遺物

東壁面に沿って幅1m、深さ50cm前後の最終確認トレンチを設定し、掘り下げを実施した。その結果、明瞭な遺構は確認できなかったものの、古代(奈良・平安時代)と考えられる遺物の散布が認められ、一部には土器片少量が集中して出土した地点も確認された。そこで最後の空中写真撮影の終了後、一週間程度の時間をかけて、地山と考えていた黄褐色粘質土が分布している地点について、面下げを行った。面下げの結果、古代(奈良・平安時代)の遺物が少量出土したものの、遺構については確認ができなかった。

以上が、中世大友府内町跡第80次調査の発掘調査の経過と推移である。層位的な所見や遺構の切り合い関係および出土遺物の年代観など、発掘調査から得られた所見と文献などから考えられる称名寺の歴史とを総合的に検討して、第80次調査で検出された遺構群を次の4段階に大別して報告することにする。

遺構群を4段階に大別

「町屋」段階(1587～1600年代)(第229図)：天正14年(1586)の島津侵攻によって、前段階の大規模施設が廃絶し、大規模施設の区画遺構である堀を埋め立てて、その上面に礎石建物数棟を構築する段階。礎石建物の裏手には廃棄土坑や井戸などが位置しており、これらの遺構は「町屋」を構成する特徴的なものとなっている。これらの町屋の遺構群は、第2南北街路の西側に展開する「唐人町」に含まれるものと推定される。出土遺物の中で特徴的なものには軟質施釉陶器碗や大窯4期に比定される瀬戸美濃系陶器の折縁ソギ皿、唐津焼など、1590年代以降に出現する遺物が含まれる。

「大規模施設」段階(16世紀後半～1586年)(第230図)：永祿年間(1558～1570)に沖の浜に移転したとされる称名寺の跡地を利用した施設が存在する段階。かつての寺域を拡張する形で、大規模な堀(SD101)が掘削されている。堀の下層から、漳州窯系青花が多数出土しており、堀の掘削年代は1570年代を遡らない。堀は水堀であり、埋土の下層からは土器・陶磁器などとともに多量の瓦や動物遺存体・貝類・木製品なども出土する。水堀は生活廃棄物や土の流入により、短期間しか機能していない。島津侵攻後、堀が埋められることから、1586年以降、大規模施設は廃絶していることが想定される。

「寺院」(称名寺)段階(14世紀前半～16世紀前・中葉)(第231図)：暦応3年(1341)に創建された称名寺が、調査地点に存在していた段階。創建当初の状況については、14世紀代に遡る可能性の高い柱穴列や井戸・土坑などが存在するものの、その詳細な様相は明らかではない。15世紀中頃から後葉にはL字状に屈曲する堀(空堀)が掘削され、寺域を画する遺構であると考えられる。

古代(奈良・平安時代)(同)：称名寺が調査地点に存在する以前の段階の遺構・遺物群である。数量的には僅少で、出土遺物の年代観から、8～9世紀代のものに限られる。

なお、発掘調査は記録保存を前提とし、検出された遺構はすべて完掘する方針で調査を実施していた。ところが、中世府内のメインストリートである第2南北街路上で礎石あるいは礎盤石(柱穴内礎石)を有する木戸(釘貫)遺構が発見された。当該遺構は2基で一対となる礎石(あるいは柱穴)のみで構成されるのではなく、石列や小石・砂利敷きの広がりなどの施設を有するものであった。遺構の良好な残存状況とその構造の特異性を鑑み、この木戸(釘貫)遺構については、検出面以下の掘り下げや撤去を行わず、埋め戻しによる現地保存を行うことにした。そのため、木戸(釘貫)遺構の下位に存在する遺構の様相は不明である。

木戸(釘貫)遺構の現地保存

以下、遺構・遺物の詳細を報告する。

2. 「町屋」段階(1587年～1600年代)の遺構

(1) 街路・街路側溝 (第232図)

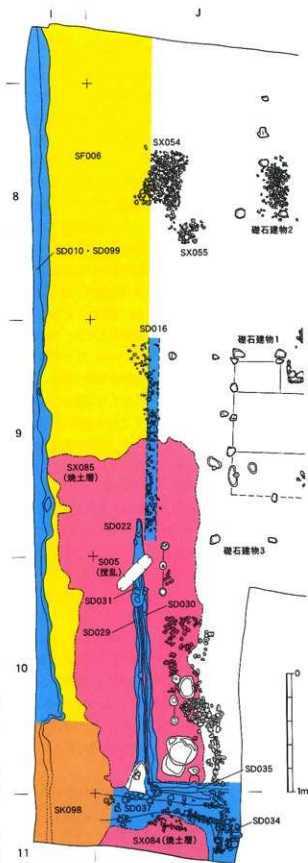
SF006

調査区西側で検出された道路遺構で、近世以降の水田層の撤去後に最初に現れる街路遺構である。天正14年(1586)焼土層SX084・SX085や16世紀後葉から末葉の街路遺構SF094の上位に位置する。上面が硬化していることから街路遺構と想定され、遺構の位置関係から、豊後府内のメインストリートである第2南北街路と断定できる遺構である。西側に側溝であるSD010およびSD099、東側には同じく側溝であるSD016・SD022・SD031・SD029・SD030が、路面を切って構築されている。街路遺構SF006はJ10・J10区南端付近が南側の終点であり、東西街路である「名ヶ小路」と交差する。従ってJ11区付近は第2南北街路と名ヶ小路の交差点に相当する。

交差点付近に注目してみると、西側溝(SD010・SD099)は明瞭に検出でき、しっかりと構築されているのに対し、東側溝(SD016・SD022・SD031・SD029・SD030)は9～11m程度しか検出できず、交差点付近では側溝が明瞭に構築されているものの、J8区以北ではその延長部を確認できなかった。このことから、J8区以北では街路と町屋の遺構群との境が不明瞭であった可能性が考えられる。第80次調査で検出されたSF006は、長さ約33m、幅員4～5mである。街路の幅員については、東西の側溝間の距離や土層断面で確認された整地層の幅を参考にした計測値である。

また、南西隅付近には大型の土坑SK098が位置しており、この土坑はSF006の路面を切り込んで構築されている。

出土遺物については、路面を構成する整地層中から16世紀後葉の遺物群が主体となって出土するが、この中に1590年代以降に生産された唐津焼や大窯IV期の瀬



第232図 SF006と周辺の遺構配置図(1/160)

構築時期は 1587～1600 年代 美濃製品が少量含まれる。以上のことから、SF006の構築時期は島津侵攻以降の1587年から1600年代に比定される。

また、特筆すべき遺物として、コンタと推定される青色ガラスの製品がある。

第233～235図に、SF006からの出土遺物を提示した。

「継接ぎ」

1～5は景德鎮系青花碗で、底部が饅頭心となるE群青花碗である。4の外底部には「大明年造」、5の内面には異体字銘が描かれている。また、1は図中の矢印部分2箇所未貫通の小孔が認められ、これは陶磁器の補修技法である「継接ぎ」の痕跡と推定される。「継接ぎ」の技法は中世の日本列島では行われていないことやこの技法で補修された出土品が列島内では少数に留まることなどから、当該資料は中国大陸ですでに継接ぎの補修がなされていたものが、日本に輸入されたと考えられる³¹。6～7は景德鎮系青花で、E群青花皿である。6の外底部には「富貴佳器」銘、9の外底部には異体字銘が描かれている。10は景德鎮系青花の小皿で、体部から大きく開く口縁部を有し、口縁部外面に兵須による圏線が一条描かれる。11も景德鎮系青花で、F群青花皿(鈎皿)に分類される。12は五彩の蓋の口縁部である。13は漳州窯系青花碗で、口縁部内外面に一条の圏線が描かれている。14は中国景德鎮系の白磁碗で、森田分類E群に分類される製品のひとつである。15は口縁部が輪花となり、見込みが蛇の目輪割ぎとなる白磁皿で、森田分類に該当がない製品である。中国南部の福建・広東周辺の商品と推定される。16は器種不明の小破片で、外面に沈線が施され、器壁の内外面に淡緑色の釉が施されている。17～27は朝鮮王朝陶磁の灰青沙器碗である。

大室IV期の瀬戸美濃系

唐津焼

28～31は瀬戸美濃系陶器である。28・29は天目碗の底部で、用途は不明であるが、高台部を残して周辺をきれいに加工した製品である。30も天目碗で、器高が低いことから、大室IV期(1590～1600年代)に比定される製品である。31は皿で、灯明皿として使用されており、内外面にススなどが付着するとともに、熱変により白く変色している。32・33は唐津焼で、1590年代から1610年代の製品である。32は碗または瓶で、内外面に灰釉を施し、外底部に糸切り痕が認められる。33は皿で、内外面には灰軸が施されている。見込みに目跡は認められない。

34・35は中国陶磁の焼締陶器と推定される製品で、34は壺の底部から胴部下位にかけての破片、35は把手の破片と思われる。36～40は備前焼である。36は壺の口縁部、37は壺の頸部から肩部の破片で、肩部外面にヘラ記号が認められる。38は壺の底部である。39・40は大甕の口縁部で、39は中世3期a(14世紀後葉)、40は近世1期(16世紀末葉)に比定される製品である。41は京都系土師器皿で、口縁部内外面にススが付着している。42～45は管状土鍾である。46は瓦質土器火鉢で、底部近くの胴部外面に高さの低い2条突帯を巡らし、板状粘土で製作された脚部を有する。

47は軒平瓦、48・49は瓦当文様が小さな珠文と尾部の長い左回転の巴文となる軒丸瓦である。50～52は砥石の破片と思われる資料である。53・54は五輪塔の空風輪で、いずれも凝灰岩を素材とする。55は安山岩を素材とする石臼、56は和泉砂岩を素材とする茶臼の胴部である。57・58は分銅。57は側面に船による検がみられ、表面に「参両(?)」、裏面に郵便マーク様の記号が、タガネによって彫られている。58は小型の製品である。59は鉛片である。府内町12次調査³²で、鉛や青銅等を使用して分銅や府内型メダイが製作された痕跡が認められることから、鉛製品の加工や生

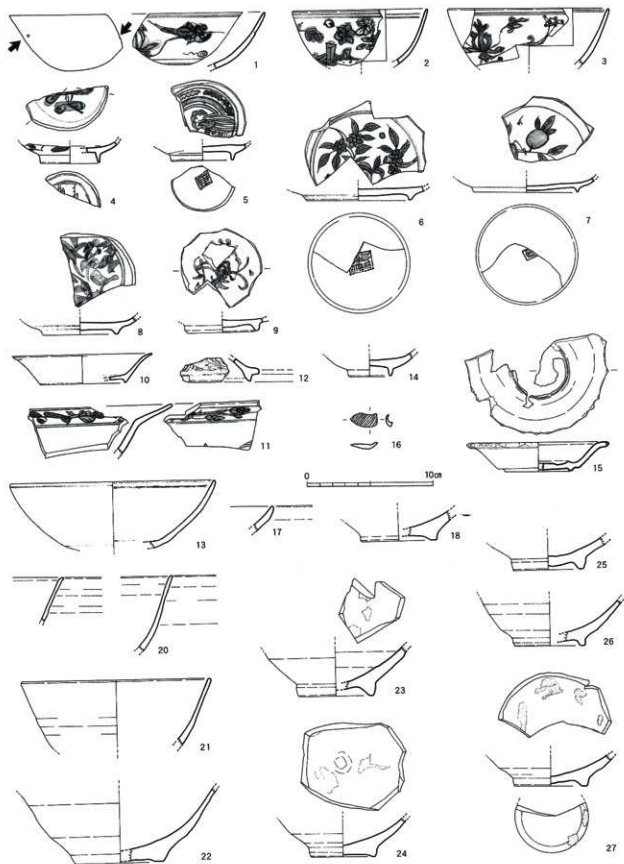
分銅

鉛片
(鉛の加工に
関連する遺物)

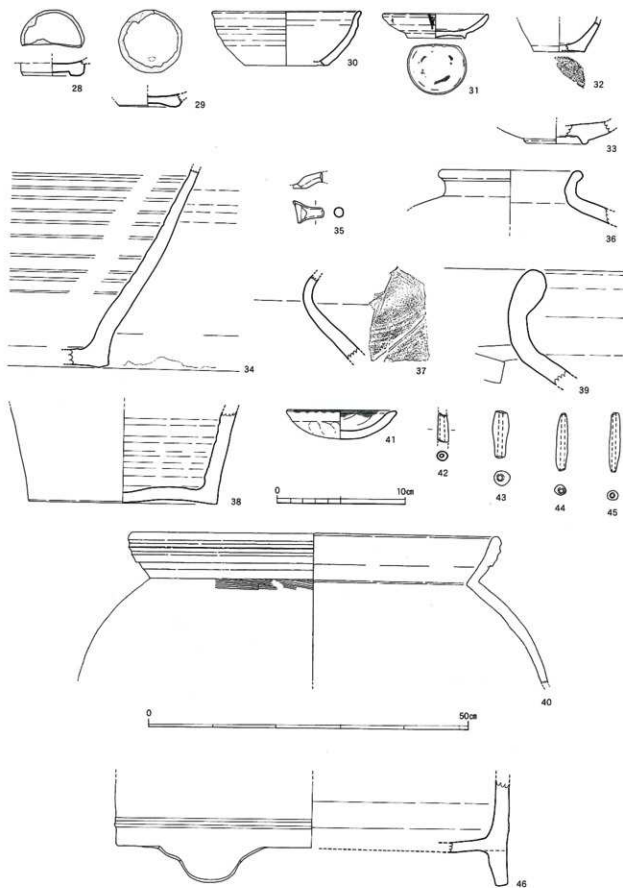
註 (1) 小野正敏氏は日本列島で出土する継接ぎの補修がされた陶磁器類は少数に留まり、しかも成信材と考えられるような高級品が多いことを指摘している。小野正敏「さまざまな「伝世」、そして修復」(『貿易陶磁研究』No.28 2008年)

大友80次で出土した継接ぎの補修痕跡がある陶磁器類は、景德鎮系青花の日常雑器碗であり、高級陶磁器ではないことが逆に注目される。中国ですでに補修がなされていたものが日本に輸入され、使用されていたと考えられるからである(小野氏に実現いただき、直接ご教示をいただいた)。当該資料は第2南北街道の豊地層群中からの出土であるが、街路西側には「唐人町」が位置しており、陶磁器のついでに使用される唐人町に居住する(中国系?)住民であったと推定される。

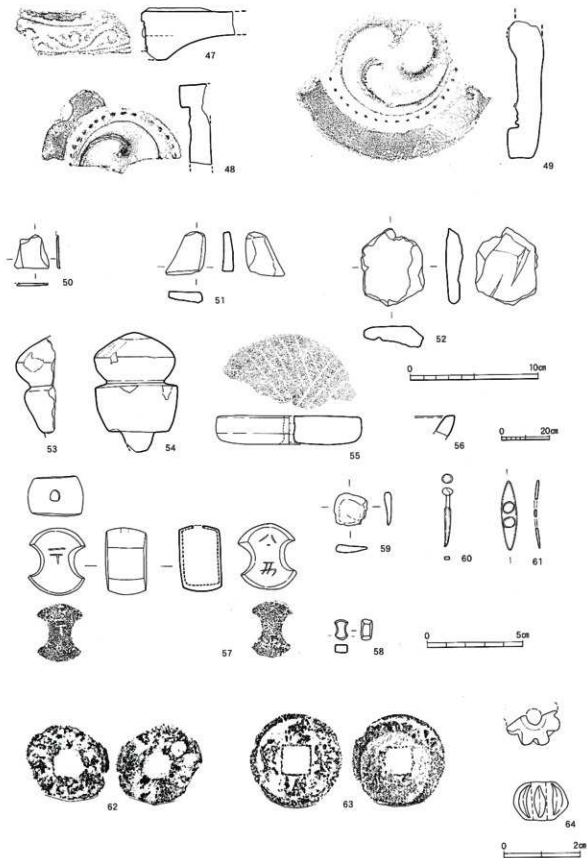
(2) 大分県教育庁歴史文化財センター「豊後府内4 中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次調査区」(大分県教育庁歴史文化財センター調査報告書第9集 2006年) 161頁
王永光洋・坂本嘉弘「大友宗朝の戦国都市 豊後府内」(新泉社 2009年) 19頁



第233図 SF006出土遺物①(1/3)



第234図 SF006出土遺物②(1/3)



第235図 SF006出土遺物③(1/3, 1/2, 1/8, 1/1)

産に関連する遺物である可能性が考えられる。60は青銅製の釘、61は青銅製の鞋金具である。62・63は銅銭で、62は判読不明、63は初鋳造年1078年の北宋銭「元豊通寶」である。

64は注目すべき遺物で、青色ガラスを花卉形に加工したガラス玉である。紐を通すための貫通孔がある。ロザリオの珠である「コンタ」と推定される製品で、キリシタン遺物と解釈されている³⁾。

コンタ 「コンタ」と推定される花卉形のガラス製品の出土は、豊後府内で6例目となる(第12表)。

第12表 コンタと推定される花卉形のガラス製品出土地点一覧(2012年3月現在)

出土地点	色調	数量	出土遺構	備考	報告書
大友8次	透明(白濁)	1	東端土坑群	大友氏館跡南側	『豊後府内』1(470頁)
大友48次	透明(白濁)	2	名ヶ小路	桜町	『豊後府内』4第1分冊(182~183頁)
大友28次	青色	1	第2南北街路	桜町	『豊後府内』4第2分冊(186頁)
大友80次	青色	1	第2南北街路	唐人町・称名寺	本報告
大友41次	淡緑色	1	表面採集	銀町	『豊後府内』16第1分冊(406頁)
総計		6			

SD010

SF006に対応する西側の道路側溝である。I7区からI10区で検出され、その規模は長さ約30m、幅0.8m、深さ約30cmである。その下位のほぼ同じ場所で道路側溝SD099が検出されており、層的な検討(土層図は第326図参照)から、SD010はSD099の掘り直しまたは改修と思われる。南側はI10区で大型土坑SK098に切られている。埋土中から石塔額の空風輪や1590年代以降に生産された軟質施釉陶器などが出土した。遺構の構築時期は1587年から1600年代である。

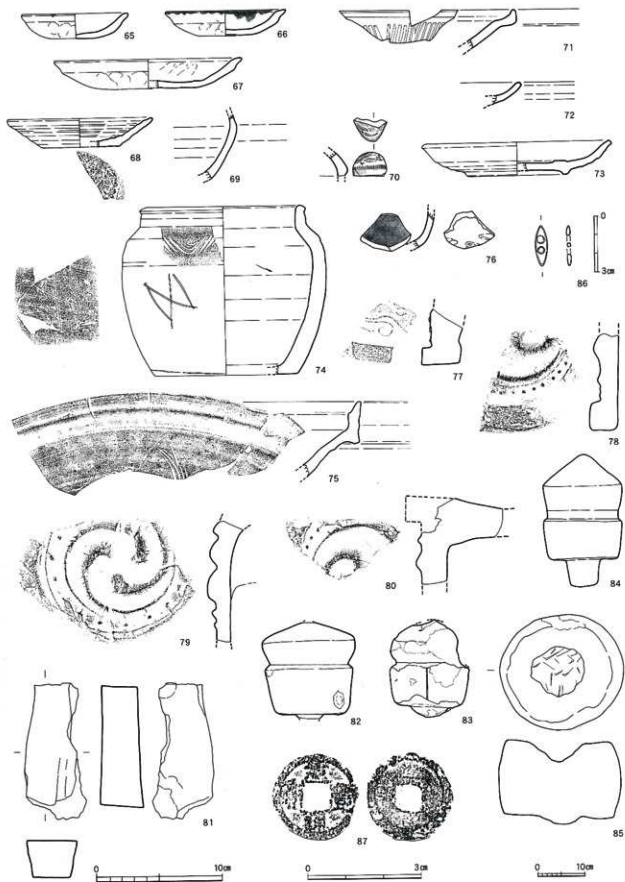
出土遺物は第236図に示した。

65~67は京都系土師器皿で、66には口縁部内外面にススの付着が認められる。68はロクロ目土師器の皿である。69は陶器の天目碗の胴部破片で、中国産の製品と推定される。70は景德鎮系青花の製品で、小型の合子などに対応する蓋であろうか。内面は露胎となる。71は龍泉窯系青磁の皿(盤)で、胴部内面に鱗文を有する。72・73は瀬戸美濃系陶器の皿である。74は備前焼の壺で肩部に掛掛波状文を有するほか、胴部外面にヘラ記号が認められる。75は備前焼播鉢で、乗岡編年近世1期の製品である。76は軟質施釉陶器碗の胴部破片で、外面に白釉とヘラ彫り文様が認められ、内面には黒釉が施されている。当該資料は1590年代以降に生産されたもので、小破片であるが、遺構の時期を決める上で重要な遺物である。77は軒平瓦(蓮華唐草文軒平瓦)、78~8016は軒丸瓦である。81は砂岩系の石材を素材にした砥石である。82~85は凝灰岩を素材とした五輪塔の部材で、82~84は空風輪、85は水輪である。また、84には梵字と思われる墨書、83には石塔の正面観を示す割付線が認められる。86は青銅製の鞋金具、87は初鋳造年1078年の北宋銭「元豊通寶」である。

構築時期は
1587~1600
年代

軟質施釉
陶器碗

註(3) 後藤元一「豊後府内のキリシタン遺物—府内型メダいの再考を中心として—」(『キリシタン大名の考古学』思文閣出版 2009年)



第236図 SD010出土遺物①(1/3, 1/2, 1/8, 1/1)

SD099

I7・J7区からI10・J10区で検出された第2南北街路西側の側溝で、道路側溝SD010の下位で検出された。長さ約25.5m以上、幅約0.5m以上、深さ約50cmを検出したが、遺構の西辺は調査区外に伸びるため、幅については正確な数値ではない。また、I10・J10区以南については、後述する木戸間連遺構を現地保存するため、掘り下げを行っていない。発掘調査時の感触では周辺の遺構の状況などから、島津侵攻以前に構築された遺構と判断していた。しかしながら、調査終了後の土層図（第326図参照）や整理作業の過程で埋土中から大窯4期（1590～1600年代）の瀬戸美濃製品が出土していたことが判明し、SD099の構築時期が1587年から1600年代に降ることが明らかになった。

大窯Ⅳ期の瀬戸美濃製品

構築時期は1587～1600年代

第237図は、SD099からの出土遺物である。

朱墨文字

88は中国産の青磁碗で、見込みと外底部が露胎となる。見込みには印花による文字、外底部には朱墨による文字が認められるが、いずれも判読不能である。89は焼締陶器で、直立する口縁部を有する。内面には罫目が残っていないが、拙鉢である可能性が高いものである。備前焼または中国産と考えられる。90は瀬戸美濃産の折縁ソギ皿で、大窯Ⅳ期（1590～1600年代）に比定される。遺構の年代を判断する上で、示標となる遺物である。91は備前焼の掛花入で、底部外面にヘラ記号が認められる。92は軒丸瓦、93～95は菱形唐草文軒平瓦である。

折縁ソギ皿

SD016

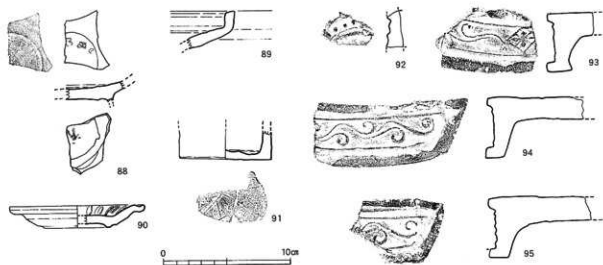
第2南北街路SF006に対応する東側の道路側溝と思われる遺構である。I7区からI10区で検出され、遺構内部に石列状に集積する礫や遺物の分布を認めたが、溝の掘形ラインを確認できなかった。調査手順として、まず遺物や礫の平面分布の状況を図面に記録し、しかる後に再度、溝の掘形ラインを追求しようとしたが、不用意にも遺物の取り上げ時に遺構周辺を掘り下げてしまい、掘形ラインの確認が不可能となった。礫や遺物の分布状況から、溝の規模は長さ約8m、幅約0.4m程度と推定される。後述する道路側溝SD022より明らかに東寄り位置しており、切り合いを有するはずであるが、上記のような調査手順のミスから、両者の切り合い関係を明確にできていない。また、天正14年（1586）焼土層SX085を切り込んで構築されており、溝の年代が1586年以降に比定されることは確実である。溝内部の石列状に集積する礫は、側溝の石組を構成していたものではなく、まとめて廃棄されたものという印象を受けた。遺構の長さは約8mと限定的であり、街路東側すべてに及ぶものではない。むしろ、後述する礎石建物1の西側に位置することから、礎石建物1と密接な関係を有する遺構と解釈することが可能と思われる。遺構の内部からは、京都系土師器や大窯Ⅳ期（1590～1600年代）の折縁ソギ皿などが出土しており、遺構の構築年代は1587年から1600年代に比定される。

構築時期は1587～1600年代

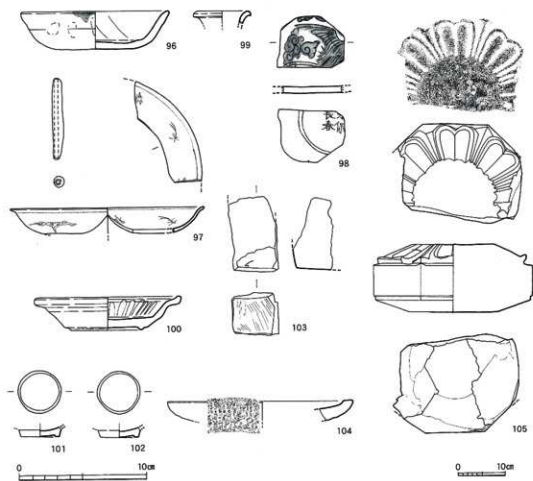
第238図は、SD016からの出土遺物である。

折縁ソギ皿

96は京都系土師器皿で、器高が高く、坏に近い形態を呈する資料である。97～98は景徳鏡系青花で、97はB1群青花皿、98はE群青花皿である。98の外底部には二重圏線内に「永保長春」銘が認められる。99は中国産の黒釉陶器壺の口縁部破片である。100は大窯Ⅳ期（1590～1600年代）に比定される瀬戸美濃系陶器の折縁ソギ皿で、遺構の構築年代を示唆する資料である。101・102は瀬戸美濃系陶器天目碗の高台部で、高台部のみを残して周辺をきれいに研磨・加工している。103は砂岩系の石材を素材とする砥石である。104は和泉砂岩を素材とする茶臼で、下臼の鈎の部位に相当する。外面にはノミによる加工痕が認められる。105は無礎塔の中台部で、凝灰岩を素材としている。



第237図 SD099出土遺物(1/3)



第238図 SD016出土遺物(1/3, 1/8)

SD022・SD031・SD029・SD030

いずれの遺構も、第2南北街路SF006に対応する東側の街路側溝である。J9区からJ11区で検出された。

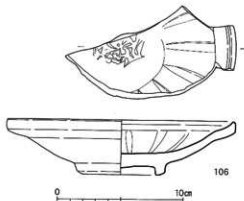
SD022とSD031は、検出時には埋土のわずかな色調の違いから別遺構と認識していたが、完掘後の状態から考えると、同一遺構と判断されるものである。その規模は長さ約3.0m、幅約0.4m、深さ約20cmを測る。検出時の切り合い関係は、次に述べるSD029とSD030を切っている。

SD029とSD030も切り合い関係にあり、構築順序はSD030→SD029となる。つまり、時期が新しくなって側溝がわずかに西に移動して構築されたことになる。両者とも遺構の規模は長さ約8m、幅約0.4m、深さ約30cmを測り、L字状に屈曲する。屈曲部でSD029はSD037と、SD030はSD035と接続している。

上記のすべての溝は、天正14年(1586)焼土層SX084・SX085を切って構築されていることから、遺構の構築年代は1587年から1600年代に比定される。いずれの遺構とも図示可能な出土遺物は少ないが、SD030から青磁の甃が出土している。

構築時期は
1587~1600
年代

第239図で図示した遺物は、SD030出土遺物である。106は龍泉窯系青磁の甃で、見込みに花文の刻印を有し、内面にはやや幅広の鎊文が施されている。その製作年代は15世紀代に比定される。



第239図 SD030出土遺物(1/3)

SD035

名ヶ小路
北側の側溝

J10区からJ11区で検出された東西方向に伸びる溝で、東端部で屈曲し、SD030と接続する。その位置関係から、豊後府内における東西街路のひとつである名ヶ小路北側の側溝と推定される遺構である。規模は長さ1.7m、幅0.4m、深さ約20cmである。天正14年(1586)焼土層SX084・SX085を切り、溝SD037から切られている。図示可能な遺物はないが、遺構の切り合い関係から、その構築年代は1587年から1600年代に比定される。

構築時期は
1587~1600
年代

SD037

名ヶ小路
北側の側溝

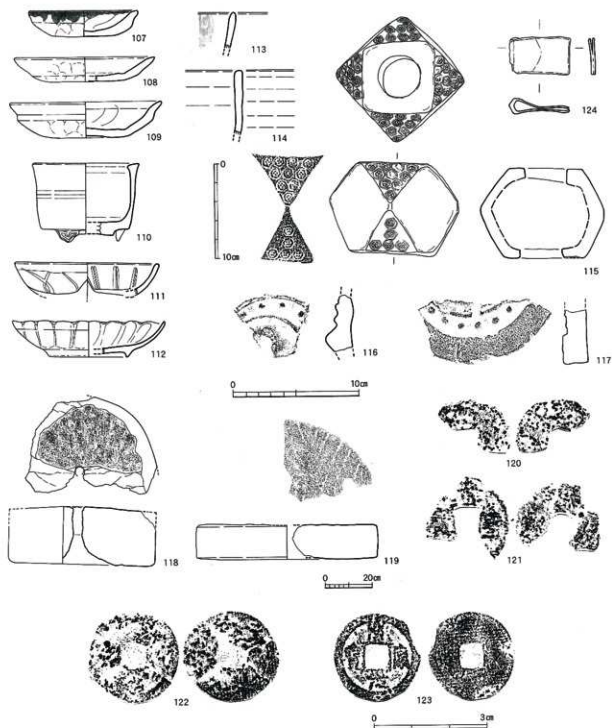
J11区で検出され、SD035の南側に位置する溝である。この溝も位置関係から、名ヶ小路の北側溝と解釈される遺構である。その規模は長さ約5.0m、幅約1.1m、深さ約30cmを測る。東西方向に伸びるが、I11区では土坑SK098の構築によって破壊されている。南北方向の街路側溝SD029および石組側溝SD034とそれぞれ接続し、屈曲部を形成する。これらの溝の位置関係から、第2南北街路と名ヶ小路が屈曲部(クランク)を形成することが明らかになった。素掘りの溝であるが、石組側溝SD034と接続する付近では、小型の礫を使用した貼石が認められる部位もある。出土遺物などから、遺構の構築年代は1587年から1600年代に比定される。

構築時期は
1587~1600
年代

第240図で図示したものは、SD037からの出土遺物である。

107~109は京都系土師器皿である。いずれも器壁が厚くなっており、型式学的に新しい様相を持つ資料である。107の内外面にはススの付着が認められ、灯明皿として使用されたことが分かる。

110は中国陶磁の青磁香炉で、そのサイズは小型で、「聞香炉」としても使用できる大きさの製品である。111は中国陶磁の青磁皿で、外面に蓮弁文を描き、内面にも2条を一単位として蓮弁を表



第240図 SD037出土遺物(1/3, 1/2, 1/8, 1/1)

現する。112は景徳鎮系の青磁皿で、型打ちによって菊花形に整形されている。

軟質施軸
陶器碗

113・114は関西系の軟質施軸陶器碗の口縁部で、外面に白釉、内面に黒釉が施されている。1590年代以降の製品で、遺構の構築年代を決める上で、重要な遺物である。

用途不明の
瓦質土器
製品

115は瓦質土器の製品で、断面形態が六角形を呈する。多面体をなすように立体的に整形されており、外面には連続した刻印（スタンプ文）を押捺する面としない面が認められる。同じ形態の製品を複数連結し、紐などを通して使用するものと推定されるが、詳細な用途は不明である。116・

117は軒丸瓦、118・119は安山岩を素材とする石臼である。

120～123は銅銭で、120～122は判読不明、123は初鋳造年1101年の北宋銭「聖宋元寶」である。

124は用途不明の青銅製品である。

SD034 (第241図)

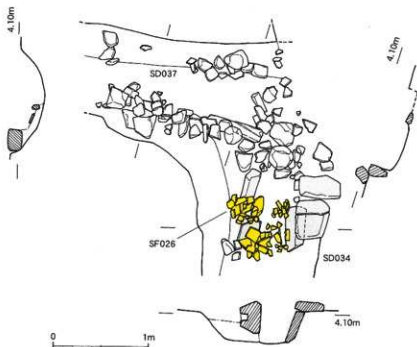
石組側溝

J11区で検出された石組側溝で、その位置関係から第2南北街路西側の側溝と解釈される遺構である。前述したSD037と接続し、屈曲部を形成する。また、南側の延長部が、第48次調査・第12次調査⁴⁾で検出されている。その規模は長さ約0.9m、掘形の上面幅約1.2m、石組の上面幅35～40cm、深さ約50cmを測る。溝の両側面は凝灰岩の板石・転用された五輪塔火輪・安山岩の礫が使用されている。凝灰岩の板石は構築当初のものである可能性が高いが、五輪塔火輪や安山岩の礫は配置の状況に乱れを認めることから、補修の際に使用されたものである可能性が高い。このような状況は第2南北街路東側の側溝である第72次調査SD031⁵⁾でも確認され、少なくとも1回以上の大規模な補修がなされていることが推定される。SD034の構築時期は、埋土中から軟質施釉陶器の破片が出土していることや他の遺構との関連から、1587年から1600年代に比定される。また、SD034の直上に瓦溜め(瓦敷き道路の一部)であるSF026が位置しており、瓦敷きの街路が機能していた段階にはSD034は廃絶または完全に機能停止していたと思われる。以上のような状況から、石組溝が実際に機能していた時間幅は、極めて短かったと想定される。

1回以上の補修

構築時期は1587～1600年代

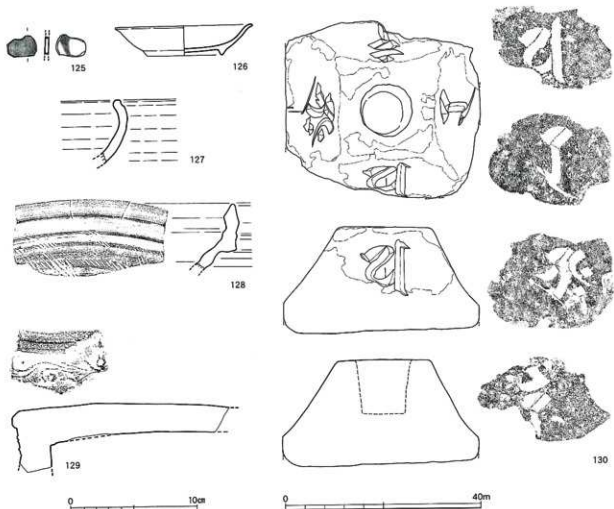
瓦敷道路SF026



第241図 SD034・SD037・SF026実測図(1/40)

注 4) 12次SD03、48次SD003、大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4 中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第9集 2006年) 83・184頁

5) 本書第4章133頁参照。



第242図 SD034出土遺物(1/3、1/8)

第242図で図示したものは、SD034からの出土遺物である。

軟質施軸
陶器碗

125は軟質施軸陶器碗で、外面に白軸と緑彩、内面に黒軸が施されている。1590年代以降に生産されたもので、小片であるが、遺構の時期の決め手となる遺物である。126は景徳鎮系白磁皿で、森田分類E群に属するものである。127・128は備前焼で、127は鉢、129は播鉢である。128は近世1期に編年される製品である。129は軒平瓦、130は凝灰岩製の五輪塔火輪で、四方に梵字が彫られている。梵字の彫りが深いなどの特徴から、鎌倉末期（13世紀後半～14世紀前半）を下限とする古い型式の五輪塔火輪である可能性が高い。

五輪塔火輪

SF026 (第241図)・SF027・SF028

瓦敷きの
道路遺構

I11・J11区で検出された瓦敷きの街路遺構である。名ヶ小路の最終段階の路面にまとめて敷かれた瓦敷きと推定され、第48次調査SF001^注と同一の遺構と判断される。層位や瓦類の出土レベルから、天正14年（1586）焼土層SX084の上位に構築されていることが確認できる。また、SF026は石組側溝SD034の直上に構築されていることは、すでに記した。出土遺物は瓦類が主体を占め、他には図示可能である遺物はない。遺構の構築年代は1600年代以降に比定される。

構築時期は
1600年代
以降

註 (6) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4 中世大友府内町跡第9次・第12次・第22次・第28次・第48次調査区』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第9集 2009年）174頁

(2) 礎石建物と関連遺構・柱穴列・柱穴

礎石建物1～3 (第243図)

J8・J9区で礎石建物の基礎と推定される礎石20基を検出した。いずれの礎石も安山岩系の石材が使用されており、原位置を保つものと思われる。個々の礎石を北側から「礎石1」～「礎石20」と番号を付して呼称する。礎石上面にレベル差を認めるものもあり、すべてが同時に存在したのとは言い切れないが、平面的な分布状況を重視して、少なくとも以下で記述する3棟の礎石建物が存在したことを想定しておきたい。

構築時期は
1587～1600
年代

礎石建物1～3は後述する16世紀末葉の堀SD100・SD101を完全に埋設した後に構築されており、層位的な所見や出土遺物から、遺構の構築時期は1587年から1600年代に比定される。

「+」字状
の刻線

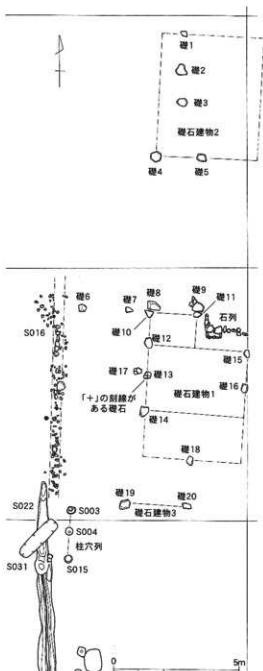
礎石建物1 (第244図) はJ9区に位置し、北側に張り出し部を持つ東西2間、南北3間の建物と推定する。建物の南側は削平を受けたとみられ、南東隅および南西隅の礎石は欠失する。また、礎石13には柱の中心を据え付けるための目印である「+」字状の刻線が施されていた(第244図131)。礎石間の寸法は図示した通りである。例えば、礎石10と礎石11間が195cm、礎石10と礎石14間および礎石12と礎石15間が395cmであることをみると、京間の1間(6尺5寸≒197cm)を基準としている可能性が考えられる。

石列SX080

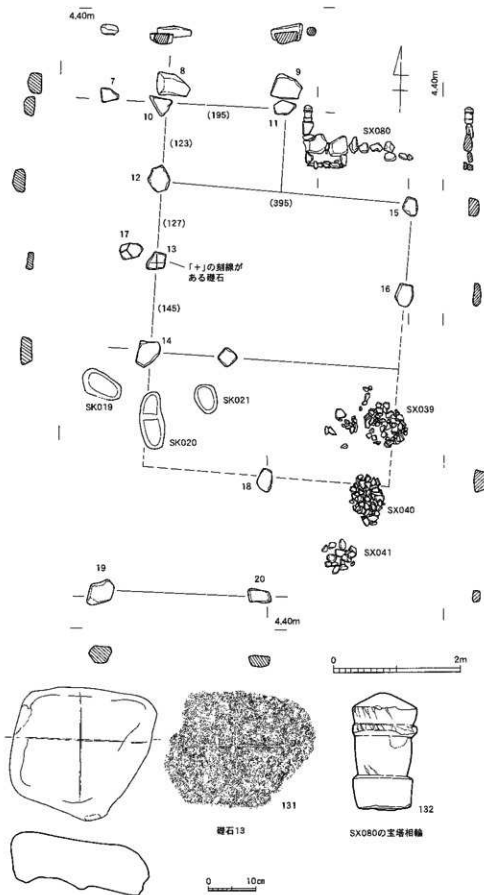
北側の張り出し部の東には、石列SX080が検出された。石列の規模は東西1.6m、南北0.8mで、北側の石列の北端部には凝灰岩製の宝塔相輪(第244図132)が転用されていた。石列の南には南北0.2m、東西0.6mを測る枡状の石列が付属する。この石列の機能は不明である。

遺物集中部
SX053

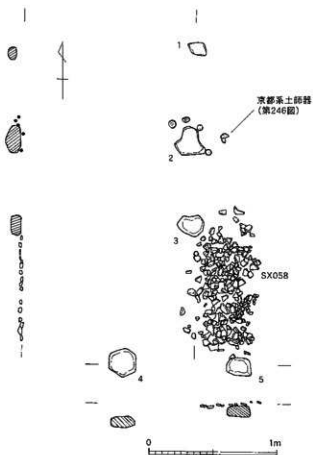
礎石建物2 (第245図) はJ8区に位置し、礎石1から礎石5の5つの礎石で構成される。礎石の残存状況はよいとはいえず、これらの礎石のみでは建物を復元することが困難である。しかしながら、礎石建物1の東側礎石列(礎石14—礎石13—礎石12—礎石10)の延長線上に、礎石建物2の礎石4が位置していることから、当該建物の平面を図示したような形で想定してみた。想定が妥当なものだとすると、東西2間、南北3～4間程度の礎石建物に復元される。また、礎石3と礎石5との空間に瓦を主体とした遺物集中部SX053が検出された。当該遺構を構成する遺物は、礎石建物の床面を強固にする目的で整地層中に突き込まれたものであろう。また、礎石2周辺からも、京都系土師器皿の完存品5個体(第246図)を含む遺物が一定量出土した。



第243図 礎石建物と周辺の遺構配置図(1/150)



第244図 礎石建物1-3と周辺の遺構実測図(1/60, 1/8)

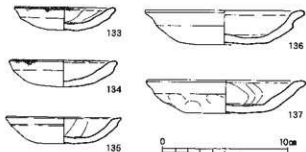


第245図 礎石建物2実測図(1/60)

礎石建物3(第244図)はJ9区に位置し、礎石建物1の南側で検出された。残存状況が不良で、礎石19および礎石20の2個の礎石が残存するのみである。建物の平面形態を復元するのは困難であるが、東側に後述する柱穴列(SP003—SP004—SP005)が存在するため、この柱穴列と関連性を有する礎石建物であったことが想定される。

礎石建物2周辺出土遺物(第246図)

図示した遺物133～137は、礎石2の周辺から出土した京都系土師器の皿で、完成品である。埴地編年3～4期に分類される資料で、16世紀末葉から17世紀初頭に比定される。



第246図 礎石建物2周辺出土遺物(1/3)

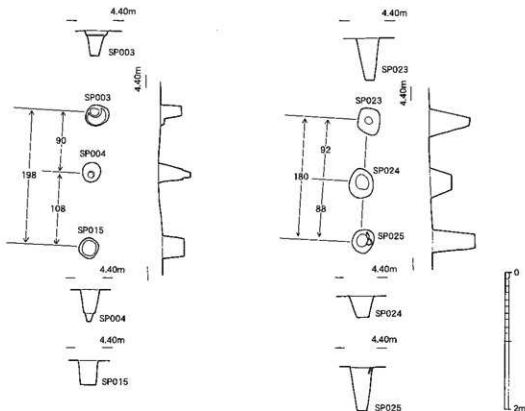
SX058出土遺物(第247図)

遺物集中部SX058の出土遺物をここで紹介する。138は瓦質土器椀鉢で、内面に9条を一単位とする揃目が施されている。底部には板状圧痕が認められる。139は



第247図 SX058出土遺物(1/3)

瓦質土器火鉢の脚部で、脚部中位に横方向の貫通孔、脚端部に火鉢を木枠などに固定するための孔が認められる。140は丸瓦で、玉縁の部位に貫通する釘穴が認められる。141・142は軒丸瓦である。142は丸瓦部の一部が残存するが、凹面には布目痕が認められるのみで、吊り紐痕などは残存していない。



第248図 柱穴列表測図(1/60)

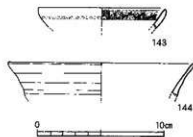
柱穴列SP003・SP004・SP015 (第248図)

埋土に焼土
を含む

J9～J10区に位置する柱穴列で、SP003・SP004・SP015の3つの柱穴からなる。個々の柱穴は、径0.3～0.3m、深さ40cm程度の大きさである。柱穴間の寸法は図示したとおりであるが、最も北側の柱穴SP003と南側の柱穴SP015との距離が1.97mで、京間の1間（6尺5寸≒197cm）を基準にして構築されている可能性が考えられる。各柱穴の埋土には焼土が含まれている（写真図版49参照）。すべての柱穴は天正14年（1586）焼上層SX085の上位を覆う茶褐色土から掘り込まれており、埋土中の焼土はこの焼土層に起因するものであろう。出土遺物で図化可能なものは少ないが、SP004の内部から、青花や灰青沙器の破片が出土している。層位や出土遺物から、遺構の構築年代は1587～1600年代に比定される。なお、このような3個の柱穴で構成される柱穴列は、後述するSP023・SP024・SP025のほか、豊後府内「桜町」の領域である中世大友府内町跡第18次西調査区および第28次調査区でも検出されている⁷⁾。

第249図で図示したものは、SP004からの出土遺物である。

143は中国景德鎮系青花で、小野頼E群青花皿である。144は朝鮮王朝陶磁で、灰青沙器碗の口縁部である。



第249図 SP004出土遺物(1/3)

注 (7) 大分県教育庁産業文化財センター「豊後府内4 中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区」（大分県教育庁産業文化財センター調査報告書第9集 2006年）第2分冊230頁

柱穴列SP003・SP024・SP025 (第248図)

J10区に位置する柱穴列で、SP023・SP024・SP025の3つの柱穴からなる。前述したSP003・SP004・SP015の柱穴列からは、南に約4.5mの距離に位置する。個々の柱穴は径0.3～0.35m、深さ40cm程度大きさである。柱穴間の寸法は図示したとおりであるが、最も北側の柱穴SP023と南側の柱穴SP025との距離が1.80mで、京間の1間(6尺5寸≒197cm)よりは短くなるようである。天正14年(1586)焼土層SX085を切って構築されているが、各柱穴の埋土は黒褐色で、焼土は含まれていないようである(写真図版40)。埋土の性状が異なるため、前述したSP003・SP004・SP015の柱穴列とは同時に存在していない可能性も考えられるが、前後関係などは明らかにできなかった。出土遺物で図化可能なものは少ないが、SP025の内部から、大塚IV期の瀬戸美濃製品や元青花梅瓶の破片などが出土している。元青花梅瓶の出土は、特筆される。層位や出土遺物から、遺構の構築年代は1587～1600年代に比定される。

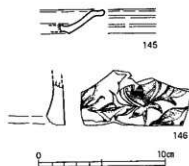
埋土に焼土
を含まない

元青花梅瓶

大友氏館跡
第21次調査
SX105の出
土遺物と接
合

第250図は、SP025からの出土遺物である。

145は瀬戸美濃系の陶器皿で、器高が低いことから、大塚IV期(1590～1600年代)に比定される可能性が高い製品である。146は元青花梅瓶の破片で、外面に牡丹文が描かれ、内面は露胎となることも、胴縁ぎの痕跡が認められる。破断面に焼土粒が多く付着していたことから、本来は焼土層SX085に含まれていた遺物と推定される。なお、本資料は大友氏館跡第21次調査SX105の出土遺物*と接合した。両者が出土した地点は、120m以上離れた場所である。



第250図 SP025出土遺物(1/3)

SP007

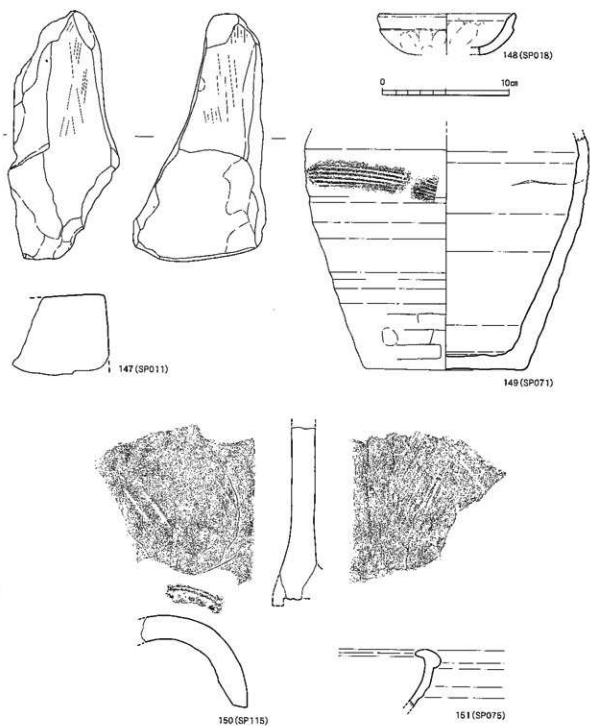
K10区に位置する柱穴で、径約0.3m、深さ30cm程度を測る。埋土中に焼土を含み、内部から多量の瓦片が充填された状態で検出された(写真図版49)。出土遺物は小破片であるため、図示していない。

その他の柱穴出土遺物 (第251図)

「町屋段階」の遺構面では、多数の柱穴を検出しているものの、建物や柱穴としてまとまるものは極めて少ない。この項目では、その他の柱穴からの出土遺物を報告する。

147はK8区に位置するSP011からの出土遺物で、砂岩系の石材を素材とする砥石である。遺構図については、第252図を参照。148はK9区に位置するSP018からの出土遺物で、京都系土師器の深手の坏である。器壁が厚く、型式的に新しい様相を示す。埴地編年3～4期に比定される。遺構図については、第257図を参照。149はL10区に位置するSP071からの出土遺物で、備前焼の甕である。肩部に梅描文を有する。残存部の梅描文は直線的に表現されている。151はK8区に位置するSP075からの出土遺物で、焼締陶器鉢の口縁部である。中国陶磁と推定される。150はJ10区に位置するSP115からの出土遺物で、軒丸瓦の破片である。瓦当文様は巴文と推定され、珠文と圓縁の一部のみが残存する。

註(8) 大分市教育委員会『大分市市内遺跡調査報告-2010・2011年度-』(2012年) 第439頁(図示されている図は天竺堂?)
なお、府内町跡第80次調査と大友氏館跡第21次調査出土の元青花破片が接合することについては、柴田圭子氏(愛媛県埋蔵文化財センター)からのご教示による。



第251図 町屋段階の柱穴出土遺物(1/3)

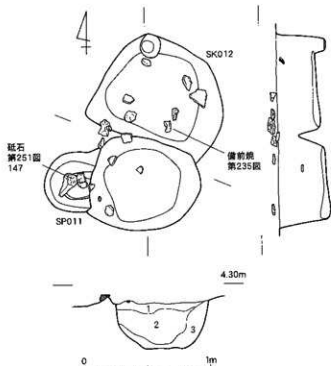
(3) 土坑・遺物集中部

本項目で取り上げる土坑・遺物集中部は、いずれも「町屋」段階に属し、1587～1600年代の所産と推定される遺構群である。代表的なものや図示可能な遺物が出土したものを、以下で報告する。

SK012 (第252図)

K8区で検出された切り合い関係にある2基の土坑である。検出段階では1基の土坑と認識していたが、掘り下げの結果、2基の土坑が重複していることが判明した。調査を進める中で、土層観察用ベルトを遺構の重複部分に設けて掘り下げてしまったために、2基の土坑の構築順序は不明である。南側の土坑は礎石などが出土した柱穴SP011に切られている。遺構の規模は、北側土坑が東西1.1m、南北0.8m、深さ34cm、南側土坑が東西0.9m、南北0.8m、深さ40cmである。平面形態はいずれも略楕円形を呈する。埋土中から、礫や陶器片・瓦片などが少量出土した。廃棄土坑と推定される。

2基の土坑構築順序は不明



1. にぶい黄褐色粘質土 (炭化物・焼土を微含む)
2. 暗褐色粘質土 (炭化物・焼土を微含む)
3. 暗褐色粘質土 (炭化物・焼土を微含む)

第252図 SK012実測図(1/30)

第252図はSK012からの出土遺物である。152は備前焼の壺の口縁部で、口縁外面に1条の沈線が認められ、口縁端部が小さな玉縁状となっている。北側土坑からの出土である。

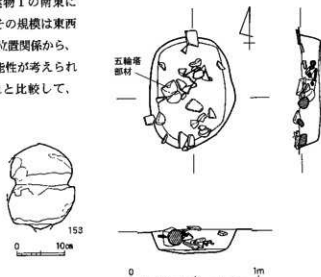


第253図 SK012出土遺物(1/3)

SK013 (第254図)

K9区で検出された土坑で、礎石建物1の南東に位置する。平面形態は略楕円形で、その規模は東西0.7m、南北0.9m、深さ18cmである。位置関係から、礎石建物1と関連する遺構である可能性が考えられるが、検出レベルは礎石上面のそれと比較して、10cm程度上位から掘り込まれている。埋土中から礫や瓦片、五輪塔部材などが出土した。廃棄土坑と推定される。

出土遺物については、第255図に示した。153は五輪塔の部材で、凝灰岩を素材とする。空風輪の部位に当する。

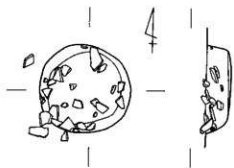


第255図 SK013実測図(1/8)

第254図 SK013実測図(1/30)

SK014 (第256図)

K9区で検出された土坑で、SK013の南側に位置する。平面形態は略円形で、その規模は径0.7m、深さ18cmである。SK013と同じく、礎石建物1と関連する遺構である可能性が考えられるが、検出レベルはSK013と同じである。埋土中から礫や瓦片、土器片などが出土したが、固化した遺物はなく、廃棄土坑と推定される。



第256図 SK014実測図(1/30)

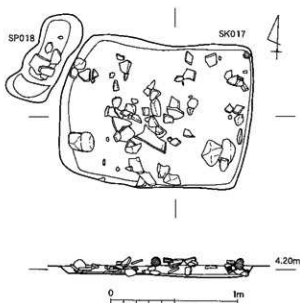
SK017 (第257図)

K9区で検出された土坑である。平面形態は略長方形で、その規模は東西1.5m、南北1.1m、深さ10cmである。「寺院」段階(14~15世紀代)の土坑SK180・SK204と切り合い関係を有し、3つの土坑の中では

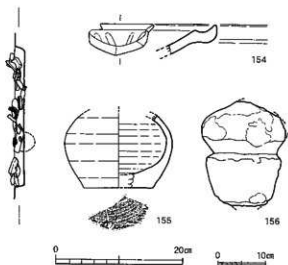
最も新しい時期に構築されている。埋土中から礫や瓦片、五輪塔部材などが出土した。廃棄土坑と推定される。なお、北東側に隣接して、京都系土師器を出土した柱穴SP018が位置している。

第258図はSK017からの出土遺物である。

154は龍泉窯系青磁皿(盤)の口縁部で、15世紀代の製品。内面に鈎文が認められる。155は唐前焼の小壺で、口縁部を欠損する。底部には糸切り痕が認められる。156は凝灰岩製の五輪塔の部材で、空風輪の部位に相当する。



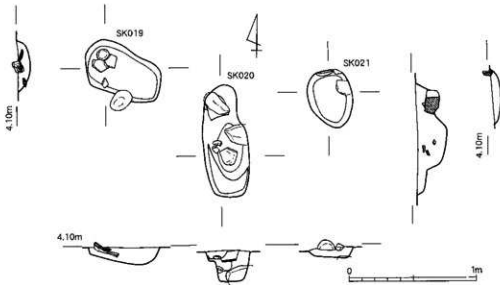
第257図 SK017実測図(1/30)



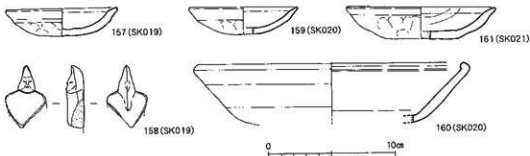
第258図 SK017出土遺物(1/3, 1/8)

SK019・SK020・SK021 (第259図)

J9区で検出された3基の土坑で、礎石建物1の周辺や重複する地点付近に位置する。平面形態はいずれも不整形で、規模については、SK019が東西0.65m、南北0.4m、深さ14cm、SK020が東西0.35m、南北0.9m、深さ27cm、SK021が東西0.35m、南北0.45m、深さ10cmである。位置関係から、礎石建物1と関連する遺構である可能性も考えられるが、検出レベルはいずれも礎石上面より



第259図 SK019～SK021実測図(1/30)



第260図 SK019～SK021出土遺物(1/3)

10cm程度上であり、礎石建物が座絶した後に構築された遺構である可能性も考えられる。いずれも規模が小さく、小規模な産業土坑と推定される。埋土中から、襷や京都系土師器、瓦片などが少量出土しており、特にSK019から出土した土製人形は注目される。

出土遺物は第260図で示した。

157～158はSK019からの出土遺物である。157は京都系土師器皿の完存品で、内面にべつとりとススが付着している。灯明皿として使用された資料である。158は立烏帽子を被った男性を表現した土製人形である。手びねりで作られており、目鼻や顎のラインは沈線で表現されている。色調は全体的に黒褐色を呈するが、沈線の内部や表面の一部に、わずかに白色顔料が残存している。そのため、製作当初は胡粉などの白色顔料が全体に塗られていた可能性がある。

159・160はSK020からの出土遺物である。159は京都系土師器皿で、器壁はそれほど厚いとはいえず、新しい時期の属性を有していない資料である。160は瓦質土器の鉢で、口縁端部は鍵形に屈曲し、端部外面に面をもつ。内外面にはナデ調整がなされている。

161はSK021からの出土遺物である。図示した京都系土師器皿で、器壁が厚い、器高が高いなど、新しい時期の様相が認められる。埴地隔年3～4期に比定される製品である。

土製人形

胡粉

SK032・SK086

(第261図)

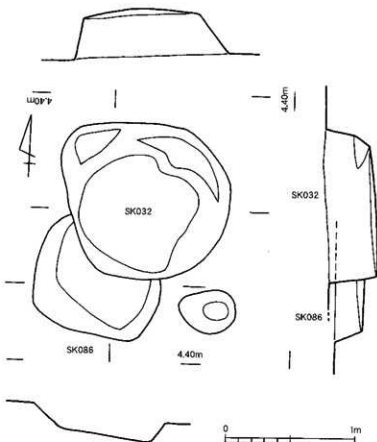
J10区に位置する土坑である。平面形態はいずれも不整形形を呈し、SK032の規模は東西1.25m、南北1.2m、深さ35cm、SK086の規模は東西1.0m、南北0.9m、深さ39cmである。両者は切り合い関係にあり、遺構の構築順序はSK086→SK032となる。SK086の埋土には焼土を多く含むのに対し、SK032にはそれをほとんど含まない。ふたつの遺構とも天正14年(1586)焼土層SX085を切って構築されている。第2南北街路と名ヶ小路との交差点付近に位置しているため、

2基の土坑構築順序は不明

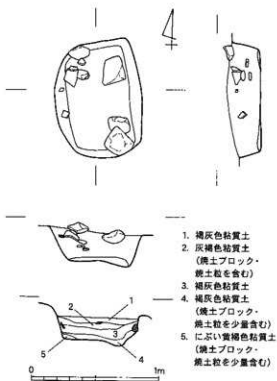
町屋構造に関する重要な機能を果たしている遺構とも推定されるが、その詳細な性格は明らかにできなかった。遺構の断面形態から、竈などが据えられていた土坑の形態である可能性も考えられる。いずれの土坑からも、図示可能な遺物は出土しなかった。

SK033 (第262図)

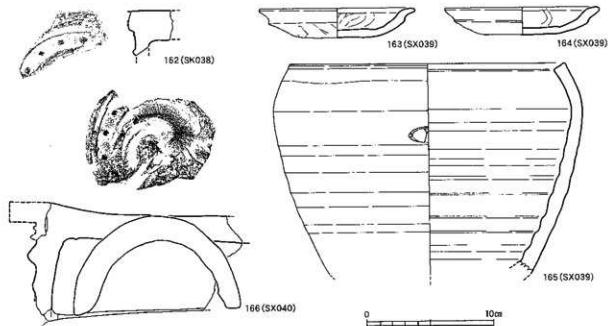
J10区に位置する土坑で、柱穴列SP023・SP024・SP025の東側に接して検出された。平面形態は不整形形で、その規模は東西0.7m、南北0.9m、深さ25cmである。内部からは瓦や拳大の礫などが出土した。天正14年(1586)焼土層SX085を切って構築されている。埋土にはこの焼土層に起因すると考えられる焼土粒が認められる。遺構の性格は廃棄土坑であろう。図示可能な遺物は出土しなかった。



第261図 SK032・SK086実測図(1/30)



第262図 SK033実測図(1/30)



第263図 SK038～SX040出土遺物(1/3)

SK038

J9区で検出された遺物集中部で、礎石建物1の北西側に位置する。東西0.3m、南北0.4mの範囲に礫や瓦片などの集中が認められた。遺構プランは検出できなかったが、廃棄土坑であった可能性が高い。特筆すべき事象はないが、出土遺物の中に軒丸瓦の小片が認められた。

出土遺物は、第263図に示した。

162は軒丸瓦である。瓦当面には巴文の尾部、珠文、圏線の一部が残存する。

SX039～SX041

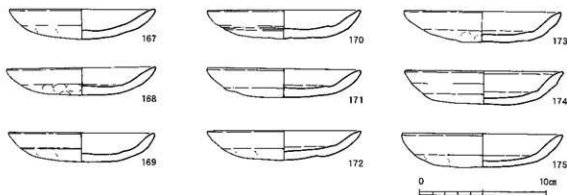
いずれもJ9区で検出された遺物集中部で、礎石建物1の南東側もしくは重複する地点に位置している。遺構の規模はSX039が東西0.7m、南北0.7m、SX040が東西0.6m、南北0.9m、SX041が東西0.5m、南北0.5mである。礎石建物1と関連する遺構である可能性も考えられるが、検出レベルはいずれも礎石上面より10cm程度上であり、礎石建物が廃絶した後に構築された遺構である可能性もある。遺構プランを検出できなかったが、いずれも廃棄土坑であった可能性が高い。礫や瓦片などの遺物の集中が認められたが、特にSX039からは京都系土師器の完存品や備前焼の水差が出した。京都系土師器と水差は、瓦や礫が集中する部位からはやや離れた地点で出土したが、これらの遺物は一括性の高い遺物群と推定される。

出土遺物は、第263図に示した。

163～165はSX039の周辺から出土した遺物である。163・164は京都系土師器の皿である。器壁が厚い、器高が高い、口縁部のナデが強いなどの特徴が認められ、埴地編年3～4期に比定される製品である。165は備前焼の水差で、茶陶として製作・使用されたものと思われる。緩やかに内湾する口縁部を有し、端部には蓋受けのための面を設けている。外面には押印文のある痕跡的な把手が貼り付けられている。

166はSX040からの出土遺物である。図示したものは軒丸瓦で、瓦当文様は左回転の巴文となる。丸瓦部凸面には縦方向の削り調整、凹面には糸切り痕(コビキA)が認められる。凹面残存部に吊り紐痕は認められない。

備前焼水差



第264図 SX042出土遺物(1/3)

SX042

J9区に位置し、京都系土師器皿が東西0.7m、南北0.8mの範囲に集中して廃棄されていた遺構である。土坑であった可能性も考えられるが、遺構プランを検出できなかった。礎石建物1を構成する礎石12の西側で検出されていることから、礎石建物1と密接な関係を有する遺構と考えたい。ただし、遺物の検出レベルは礎石上面のそれより、10~15cm程度上位となっている。

出土遺物は、第264図に示した。

167~175は京都系土師器皿である。器壁が厚い、口縁部外面のナデが弱く、ナデによって生じる稜線が胴部中位以下となっているなど、型式学的に新しい様相が窺える。埋地層年4期(16世紀末葉~17世紀初頭)に比定される資料であろう。

SX078 (第265図)

J9区に位置する遺物集中部である。礎石建物1の完備時に遺構上面の一部が検出されていた状況であったが、その後掘り下げを進めると礎・遺物の分布が広がり、東西2.2m、南北4.0mの範囲となった。掘り下げ完了時の遺物の分布状況を見ると、礎や石塔部材・瓦片がぎっしりと密集する北側の集中部と礎が主体となる南側の集中部の2つのブロックが認められるようである。これらは本来2基の廃棄土坑で、埋土と周辺土壌の色調が類似していたことから、遺構プランを検出できなかったものである可能性が高い。層位的な関係から、礎石建物1に先行する時期に構築された遺構である。出土遺物としては、土師器・陶器・瓦・石塔部材などが認められる。

出土遺物は第266図に示した。

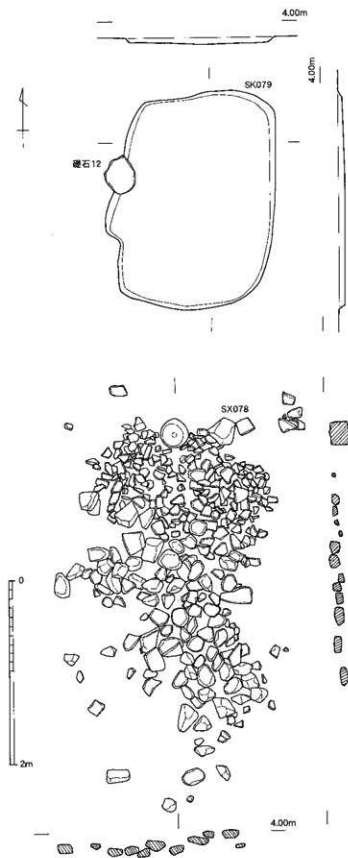
176は京都系土師器の皿の完存品である。口縁端部の内外面にススの付着が認められることから、灯明皿として使用されたものであろう。177はロクロ目土師器の皿である。178は備前焼大甕の胴部破片で、外面にヘラ描き(文字またはヘラ記号?)、内面にハケメ状の調整が認められる。179は備前焼壺の底部破片である。180~182は軒丸瓦、183は鑿羽瓦で、側面に袖部を設けている。「鑿羽」と呼ばれる屋根の妻の部位に使用される道具瓦である。瓦当文様は宝珠唐草文軒平瓦で、瓦当面が完存する資料である。184・185は凝灰岩を素材とする石塔部材で、184は無礎塔、185は五輪塔の水輪である。

2基の
廃棄土坑?

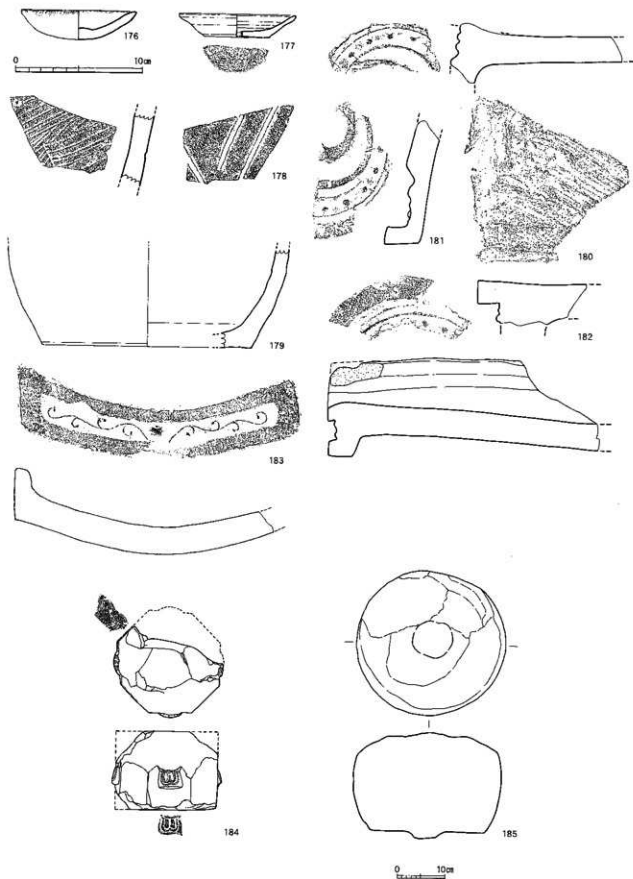
鑿羽瓦
(けらば
がわら)

SK079 (第265図)

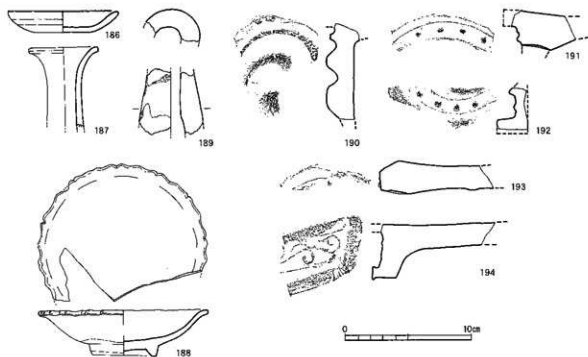
J9区に位置する土坑で、遺物集中部SX078の北側で検出された。遺構の平面形態は略隅丸方形を呈し、その規模は東西1.85m、南北2.3m、深さ5cmである。礎石建物1を構成する礎石12と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK079→礎石建物1(礎石12)となる。礎石建物1に先行して構築されていた廃棄土坑であろう。埋土中から、瓦片・礎・陶磁器片などが出土している。



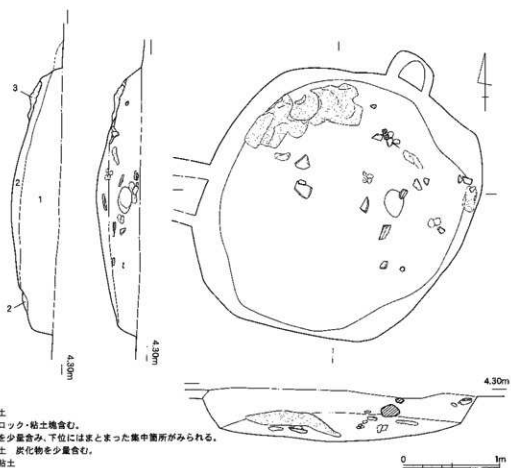
第265図 SK078・SK079実測図(1/40)



第266図 SX078出土遺物(1/3・1/8)



第267図 SK079出土遺物(1/3)



- 1 暗褐色土
粘土ブロック・粘土塊含む。
炭化物を少量含む、下位にはまとまった集中箇所がみられる。
- 2 黄褐色土 炭化物を少量含む。
- 3 灰白色粘土

第268図 SK174実測図(1/40)

第267図はSK079からの出土遺物である。

186は京都系土師器の皿で、器壁はそれほど厚くなく、塩地福年2期前後の特徴を示す。187は備前焼徳利の頸部の破片である。188は中国南部の白磁皿で、高台部付近が露胎となる。口縁部は輪花となっている。189は輪羽口の破片で、外面に被熱の痕跡が認められる。190～193は軒丸瓦、194は軒平瓦の破片である。

SX174 (第268図)

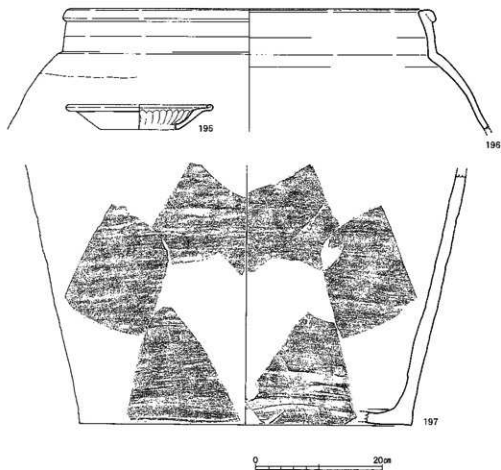
L9～L10区に位置する上坑で、平面形態は略円形を呈し、規模は東西2.8m、南北2.9m、深さ45cmである。埋土は焼土粒と細かい粘土粒子が混じった上層とそれらがほとんど混じらない均一な粘質土層である下層の2層が認められる。なお、遺構の掘り下げに際して、床面を30～40cm程度掘り過ぎていた。埋土から陶器片などが出土したが、北側壁面付近には黄白色の粘土ブロックが認められた。単なる廃棄土坑であるとは思えないが、その性格を明らかにすることはできなかった。大塚4期の瀬戸美濃製品が出土しており、遺構の年代が1590年代以降に降ることがわかる。

出土遺物は第269図に示した。

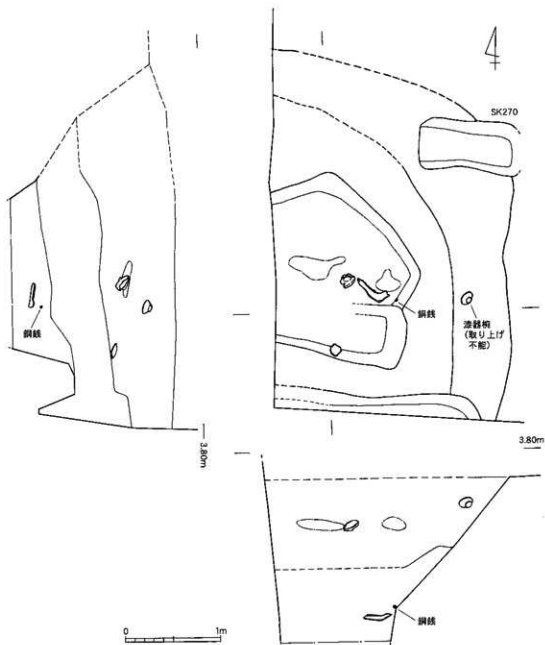
黄白色の粘土ブロック

折縁ソギ皿
大型の焼結
陶器片
(中国南部
または東南
アジア産?)

195は瀬戸美濃系の折縁ソギ皿である。大塚Ⅳ期の製品で、製作年代は1590～1600年代に比定される。196・197は大型の焼結陶器壺である。口縁端部は折り返しにより製作しており、肩部には重ね焼の痕跡が認められる。胎土は縞状になる粘土が用いられている。中国陶磁と推定されるが、胎土の特徴から、東南アジア陶磁である可能性も考えられる。



第269図 SK174出土遺物(1/3)



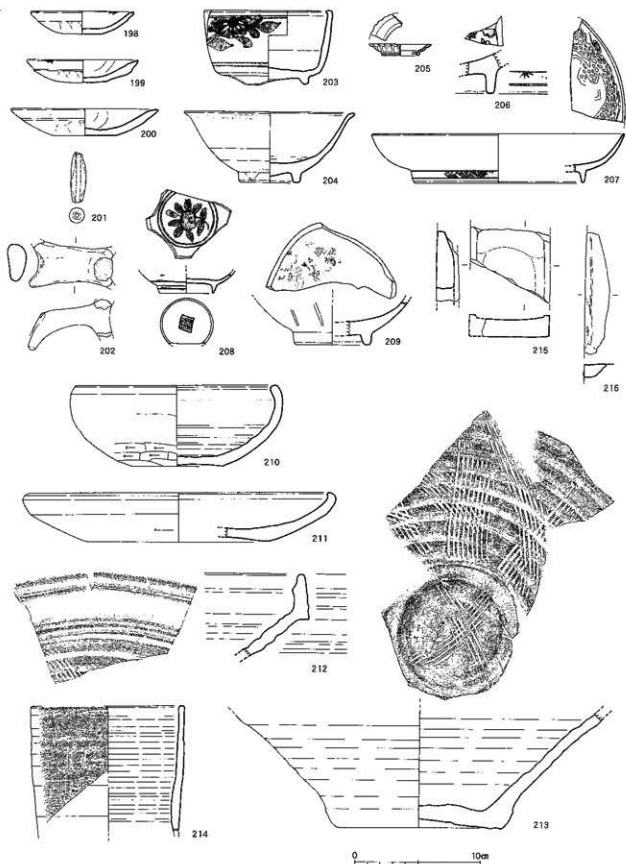
第270図 SK198実測図(1/40)

SK198 (第270図)

調査区南西隅のI10～I11区に位置する大型の土坑である。平面形態は不整形を呈し、規模は東西2.4m以上、南北3.8m以上、深さ1.7mを測り、さらに調査区外に伸びる。天正14年(1586)焼土層SX084・SX085や道路側溝SD010、性格不明の土坑SK270(SK270は出土遺物が僅少のため、正確な構築時期は不明)を切っており、周辺の遺構の中で最も新しい時期に構築されている。内部は2段掘りとなり、埋土は水気の多い粘質土で構成される。遺構の断面形態や埋土の状況から、井戸や水溜めの遺構である可能性も考えたが、素掘りであることや井筒・井戸弁などが出土していないことから、廃棄土坑であると判断した。内部からは土器・陶磁器類のほか、獣骨類の出土が目立つ。埋土上位から漳州窯系青花の香炉や漆器椀(漆器椀は状態が悪く、取り上げ不能)、埋土下位からウマの下顎骨や繻状態の銅銭30枚が出土している。

獣骨類の出土

繻銅銭



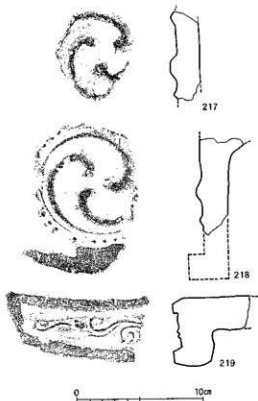
第271図 SK198出土遺物①(1/3)

第271～274図は、SK198の出土遺物である。

大型土製品
(大型)

漳州窯系青花
花香炉(優品)

198～200は京都系土師器の皿、201は完存品の土罐である。202は犬形土製品で、このサイズのものでは大型の規格に相当する。頭部を欠損している。203は漳州窯系青花の香炉で、外面に牡丹文を描く優品である。内面は露胎となっている。204は漳州窯系青花の碗、205は青釉陶器小皿の破片である。206は景德鎮系の磁器で、五彩の盤の高台部周辺の破片である。207は景德鎮系青花皿で、型打ちにより内面に龍文を打ち出しする。胴部内外面には文様がなく、高台外面に呉須で銅銜文を描く。208も景德鎮系青花で、小野分類E群青花碗である。高台内には異体字銘が認められる。209は龍泉窯系青磁碗で、外面に蓮弁文が認められる。内面に付着物が認められるが、詳細は不明である。210～214は備前焼。210・211は鉢、212・213は乗間編年の近世1期の播鉢、214は筒形の鉢または掛花入であろう。214の外表面にはヘラ記号が認められる。215は輝緑凝灰岩を素材とする赤間焼、216は淡緑色の石材を使用した碗である。

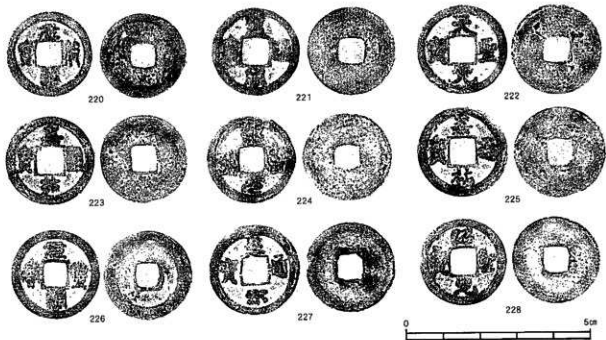


第272図 SK198出土遺物②(1/3)

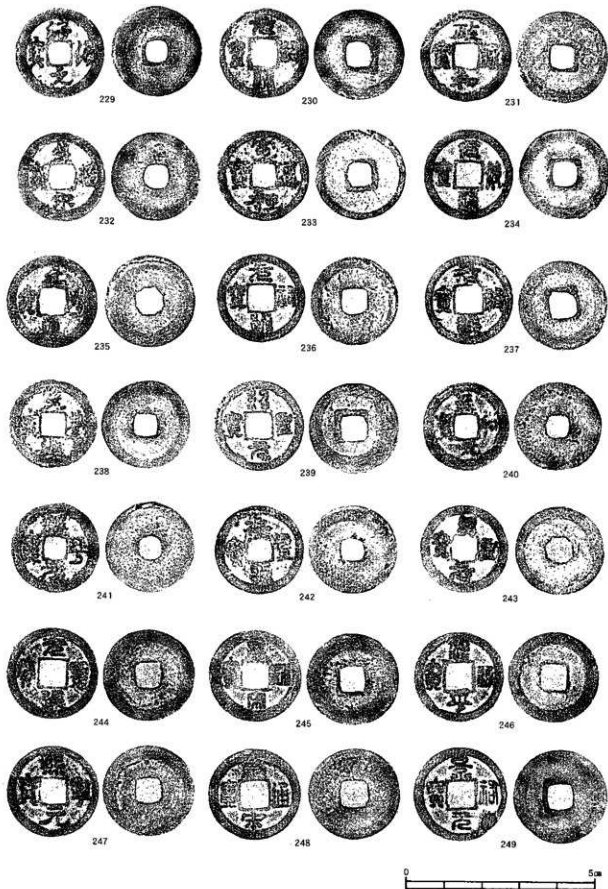
217・218は軒丸瓦、219は蓮華唐草文軒平瓦の破片である。

銅銭
(30枚が箱の
状態で出土)

220～249は銅銭で、30枚が箱の状態で出土し、図示した順で繋がっていた。各々の銭種や初鋳造年については、巻末の遺物一覧表を参照されたい。このうち、最古銭は「淳化元寶」(北宋990年)、最新銭は「宣和通寶」(北宋1119年)である。



第273図 SK198出土遺物③(1/1)



第274図 SK198出土遺物④(1/1)

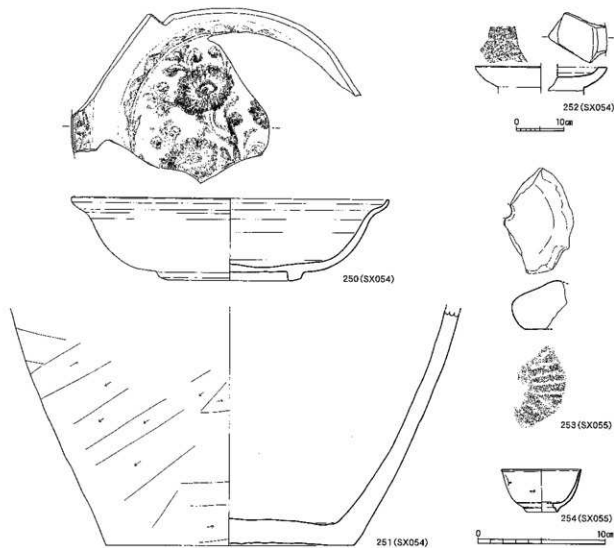


第275図 SX054・SX055実測図(1/30)

(4) 集石遺構・石積み遺構

SX054・SX055 (第275図)

J8区に位置する集石遺構である。SX054は平面形態が略長方形で、東西1.5m、南北2.3mの範囲に縦や二次的に被熱した瓦片を密に敷き詰めている。当該遺構の南東部は明らかに第2南北街路SF006の領域にまで張り出している。遺構の性格は不明である。



第276図 SX054・SX055出土遺物(1/3、1/8)

SX055

SX055はSX054の南東約0.6mの地点に位置する。平面形態は不整形で、方形に加工した凝灰岩(石塔の部材?)を中心に東西0.7m、南北0.9mの範囲に大型の礫などを集めている。凝灰岩は折えられた感じではなく、他の石とともに廃棄されているような印象を受けた。従って、この凝灰岩の上に石塔などが立っていた可能性はないと判断している。これも遺構の性格は不明である。周辺の状況から、2つの集石遺構の構築時期は1587～1600年代と推定する。

出土遺物は、第276図に示した。

250～252がSX054の、253・254がSX055の出土遺物である。

250は漳州窯系青花の大皿(盤)である。外面は無文であるが、口縁部内面を文様帯とし、見込みには咲き乱れる複数の花文が描かれている。251は備前焼の甕または壺の底部で、外面には削り調整がなされている。SX054のほかに、「大規模施設」段階(1570～1586年)に帰属する道路側溝SD090・SD091出土の破片が接合している。252は和泉砂岩を素材とする茶臼の下部である。

253は安山岩系の石材を素材とする石臼の上臼、254は景徳鎮系青花の小杯である。



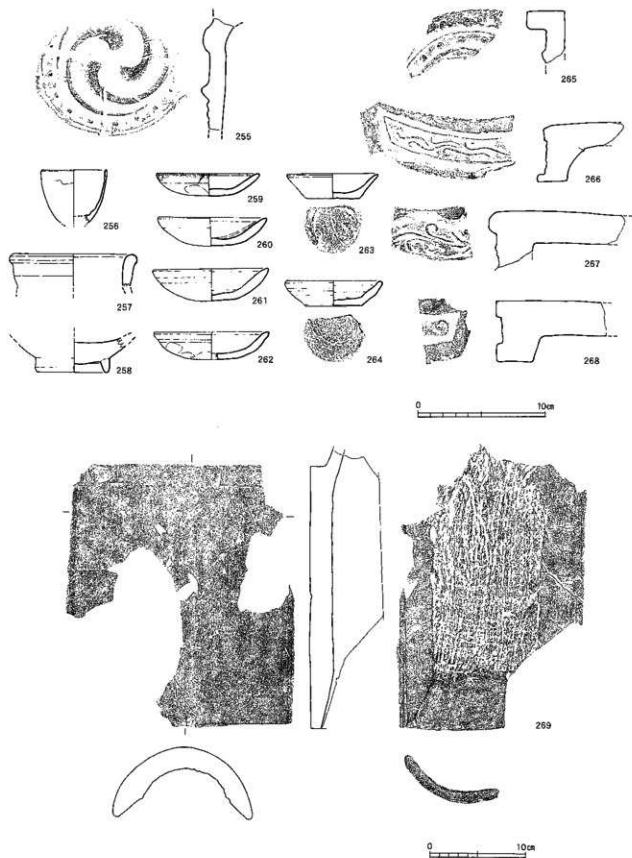
第277図 SX036・SX088実測図(1/30)

SX036・SX088 (第277図)

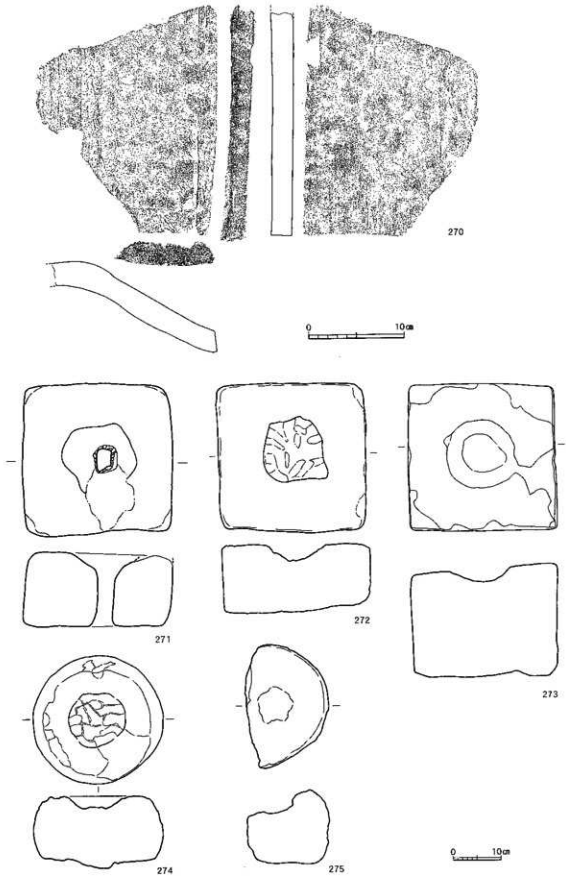
K8区で検出された石積み遺構である。不整形で半円状を呈する瓶形(東西1.6m、南北3.2m、深さ75cm)の西側にSX036、東側にSX088が構築されている。

SX036は頭大以上の大きさの礫が6段程度積まれたもので、その大半が安山岩であるが、一部には方形に加工した凝灰岩や石臼なども用いられている。石積みの長さは1.9m、高さは0.6mであるが、背面に裏込めとして、瓦や小型の礫が少量混入されていた。石積みの最下段は掘り込みの底面まで達しておらず、底面から最下段の石積みまでの間には20cm程度、黒褐色土が堆積している。従って、石積みは掘り込みが掘削されてから黒褐色土が堆積するまでの一定期間が経過した後構築されたものである。遺構の性格は不明である。

SX088も2段程度の石積みとなされているもので、基底部に用いられた石の多くに凝灰岩製の石塔部材(五輪塔の地輪や水輪)が転用されていた。石積みの平面形態は緩やかに湾曲しており、そ



第278図 SX036-SX088出土遺物①(1/3, 1/4)



第279図 SX036-SX088出土遺物②(1/4, 1/8)

の長さは約3.2mを測る。遺構中央部の東側に接して、数多くの準大の礎や瓦片などが廃棄された状態で見つかった。これについても、遺構の性格は不明である。

構築時期は
1587～1600
年代

周辺の遺構の状況から、SX036・SX088はいずれも「町屋」段階（1587～1600年代）の遺構と考えられる。

出土遺物は第278・279図に示した。255がSX036の、256～275がSX055の出土遺物である。

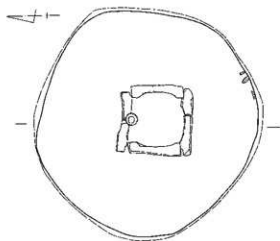
255は軒丸瓦の破片である。

産地不明の
小杯形
焼締陶器

256は小杯形の焼締陶器で、産地不明とされることが多い製品である。内面に金属滓と思われる付着物が認められ、取瓶などとして転用されている可能性も考えられる。近年、琉球・長崎・大坂などで報告例が増加しているが、出土事例が少ない。豊後府内では他に府内町5次B区⁹⁾、11次¹⁰⁾で報告例があるものの、本例を含めて3例に留まる。257は備前焼の壺の口縁部である。258は青磁碗で、SX036のほか、街路側溝SD010出土の破片が接合している。259～262は京都系土師器の皿である。263・264は在地系の土師質土器小皿で、263は内面にロクロ目が認められないが、264は内外面にロクロ目が顕著に残るロクロ目土師器である。265は軒丸瓦、266～268は軒平瓦の破片である。269は丸瓦で、凹面に九州タイプの吊り紐痕が残る。

270は鳥雲瓦の破片である。271～275

は石塔額の部材で、SX088の基底部に転用された石材である。いずれも凝灰岩製で、271～273は地輪、274・275は水輪である。271の中央部には貫通孔が認められる。



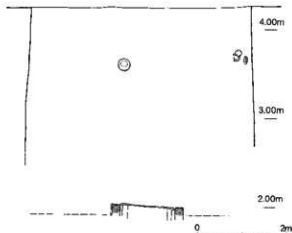
(5) 井戸

「町屋」段階（1587～1600年代）に帰属する井戸は、SE001・SE002・SE173の3基を数える。いずれも周辺の遺構の状況や出土遺物から、当該段階に比定される。

SE001（第280図）

L9区に位置する井戸で、掘形の平面形態は径約2.5mの円形である。検出面から約2.2m掘り下げたところ、井筒と思われる石組みを検出した。石組みは凝灰岩製で、内面を弧状に加工した5枚の板状石材からなる。この内部に桶を1段設置し、水溜めの構造を形成すると思われるが、桶そのものは残存していなかった。これまでの調査事例を参考にすると、この水溜部の上にさらに凝灰岩の板石を六角形の形に敷段配置する井筒の構造をもつが、

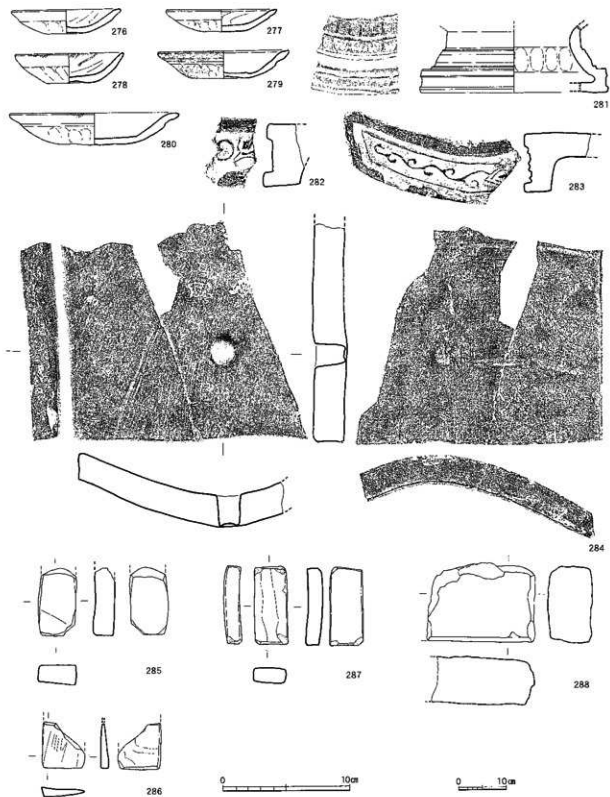
凝灰岩製の
石組み



第280図 SE001実測図(1/50)

註 9) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1 中世大友府内町跡第5次・第8次調査Ⅱ』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第1集 2005年）第476図26、365頁参照。

10) 本書第3巻第58図227参照。



第281図 SE001出土遺物(1/3, 1/8)

井筒を構成する石材は残存していない。井戸の廃棄時に抜き取りを行った可能性が高いと推定される。また、銅形埋土上位から京都系土師器の皿が完形もしくは完形に近い状態で5個体出土した。

(うち、1個体は不用意に取り上げを行ってしまい、位置やレベルの記録ができていない。)このうちの3個体は、掘形南東側から集中して出土している。土層断面などの観察が不十分であるものの、これらの京都系土師器は井筒の抜き取りを行った後、井戸を埋め戻す際に行った儀礼に使用されたものである可能性が高いと考える。井筒を検出したレベルから更に掘り下げを行ったところ、湧水が激しくなり、遺構壁面崩落の危険が生じたため、凝灰岩の板石は取り上げを行わず、現地に残したまま埋め戻しを行っている。

第281図は、SE001の出土遺物である。

276~280は京都系土師器の皿である。器壁はそれほど厚くなく、新しい属性を有していない。

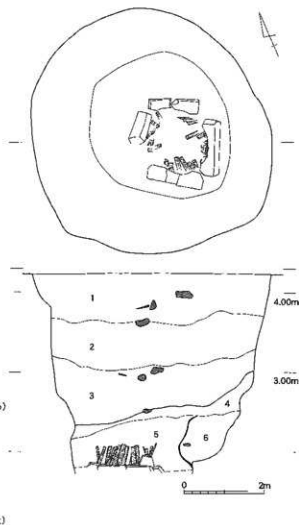
278~280にはススの付着が認められ、灯明皿として使用されたことがわかる。231は瓦質土器の風炉で、外面に二連雷文と蓮弁文の刻印、竹管による丸文が押捺されている。282・283は軒平瓦の破片である。284は平瓦で、凹面から施された孔が存在するが、貫通しておらず、本来の機能(釘穴)を果たしていないものと思われる。285~288は砥石である。

SE002 (第282図)

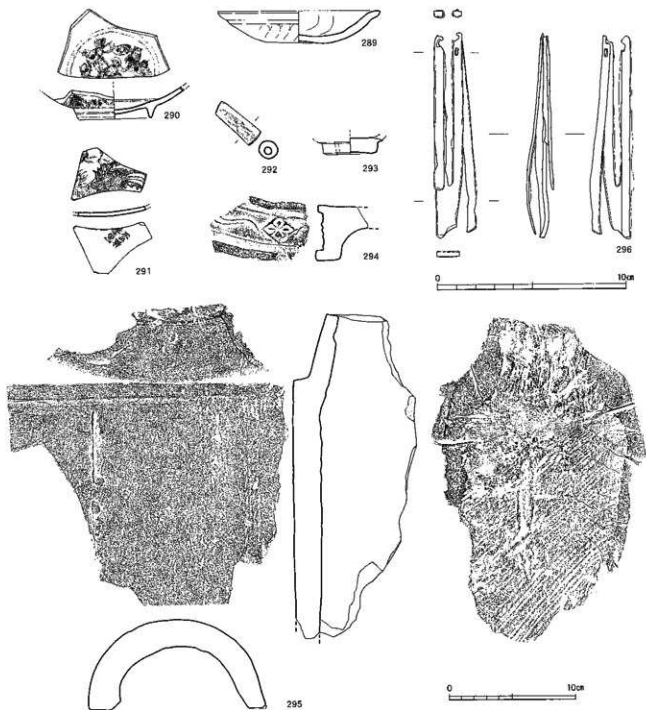
K8~L8区に位置する井戸で、掘形の平面形態は径約3.0mの略円形である。検出面から約2.2~2.5m掘り下げたところ、井筒を構成する桶とそれを補強する機能をもつ石組みを検出した。石組みはSE001と同様の構造で、凝灰岩製の板状石材4枚の一辺を弧状に加工したものである。検出された桶はタガが外れ、ばらけていたものの、抜き取られずに立った状態で出土した。この桶が水溜めの構造を形成すると思われる。水溜部を囲む形で凝灰岩の板石を六角形の形に数段配置する井筒の構造を取っていたと推定され

井戸儀礼

桶の出土



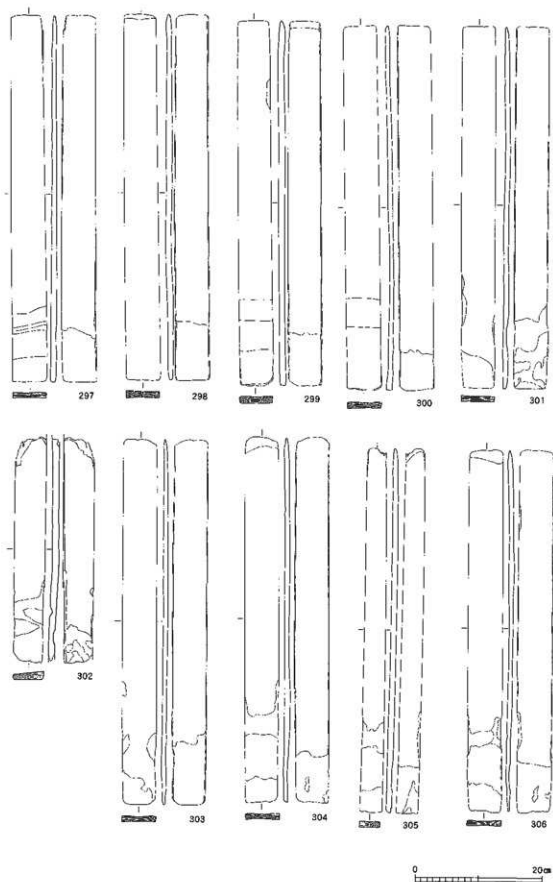
第282図 SE002実測図(1/50)



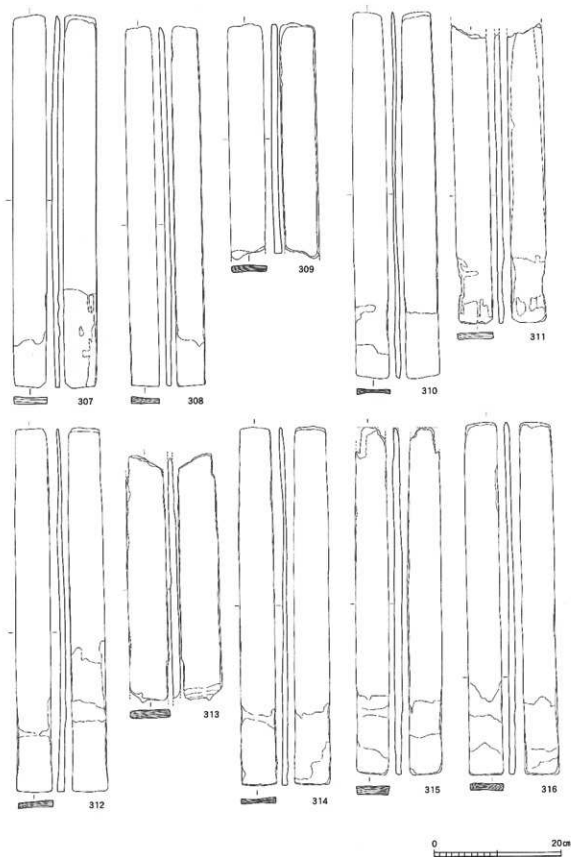
第283図 SX002出土遺物(1/3, 1/2)

土層断面

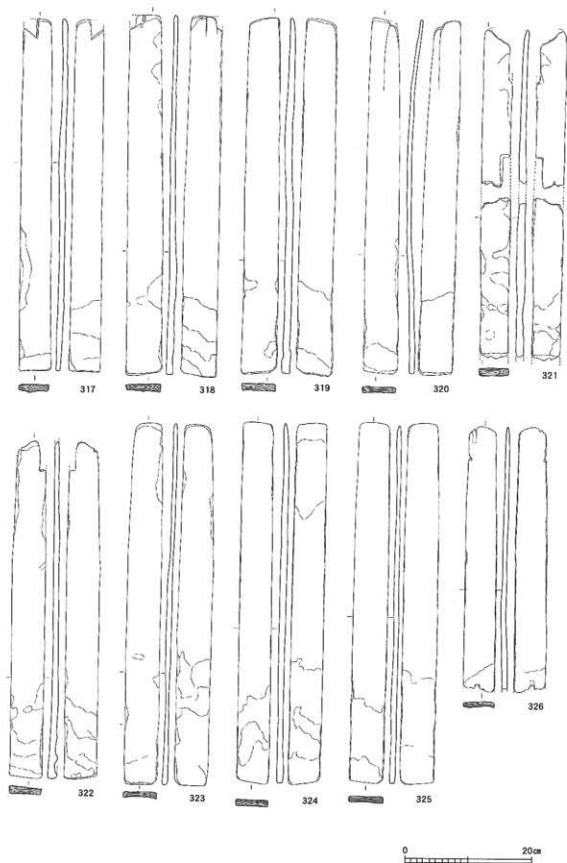
るが、井筒に使用された石材は出土していない。井戸の廃棄時に抜き取りを行った可能性が高いと推定される。土層断面の1～3層が井筒の抜き取り行為を反映する土層、5・6層は井戸使用時の土層と思われる。3層と4層の層界には酸化鉄が付着する。6層は井筒の裏込めで、5層との層界にも酸化鉄が帯状に付着していた。桶を検出したレベルから更に掘り下げを行ったところ、湧水が激しくなり、これ以上の掘り下げを断念した。桶については取り上げを行ったが、凝灰岩の板石は現地に残したまま埋め戻しを行っている。



第284図 SE002出土遺物②(1/6)



第285図 SE002出土遺物③(1/6)



第286図 SE002出土遺物④(1/6)

第283～286図は、SE002からの出土遺物である。

289は京都系土師器の皿である。器壁はそれほど厚くないが、口縁部に強いナデを施し、当該部位を外反させている。290・291は景徳鎮系青花の製品。290は胴部から続く底部内面が高台内にくぼむような断面形態をなす碗で、小野分類C群青花碗(蓮子碗)である。291はE群青花皿で、内面に鳳凰文、外面に「富貴佳器」銘を描く。292は水注の注口部で、外面に溝状文を描いている。

293は瀬戸美濃系器の天目碗と思われ、高台部のみを残した再加工品である。294は軒平瓦で、瓦当文様は菱形唐草文である。295は丸瓦で、外面に縄目叩き、内面に糸切り痕(コビキA)が認められる。296は銅を素材としたもので、鉈前の内部構造を構成する金属製品である可能性がある。

桶の側板

297～326は、桶に使用されていた側板である。SE002から検出された桶には30数枚の側板が使用されており、保存状態はそれほど良好なものではなかったが、30枚を実測して提示した。側板は下端部が薄くなるように加工されており、加えて下端部下辺を斜めに加工したもの(310・322・324)や下端部下辺の一端を斜めに切り落とす加工(303・307・325)がある。また、外面にタガの痕跡が残る資料(297・299・300)も認められた。

SE173 (第287図)

L9～M9区に位置する井戸で、掘形の平面形態は径約3.5mの円形である。検出面から5cm掘り下げた段階で、井筒の抜き取り痕である平面形態が略楕円形を呈する長軸2.3m、南北1.8mの掘り込みプランを検出した。その後、井戸の掘方を半截する形で掘り下げを続行したところ、この抜き取り痕の範囲に集中して、凝灰岩や安山岩の礫が出土した。礫は検出面から約50cmの深さに分布しており、それより下位からは出土しなくなる。このことから、礫は井筒の抜き取りが終了した後、抜き取り痕を埋め戻す作業の最終段階で投棄されたものと推定される。

五輪塔空風輪・宝塔相輪の出土

礫を撤去し、さらに掘り下げを進めると、水溜め部の上位で五輪塔の空風輪や宝塔の相輪11個がまとまって出土した。その分布状態から、これらは井筒の抜き取りが終了した直後に、抜き取り痕の底面付近にまとめて廃棄されたものであろう。空風輪や相輪のみが出土したのは、五輪塔や宝塔の火輪・水輪・地輪などは建築部材として様々な転用が可能であるが、空風輪・相輪はその形状から建築部材として転用が難しいため、廃棄されたと推定する。

転用石材による石組み

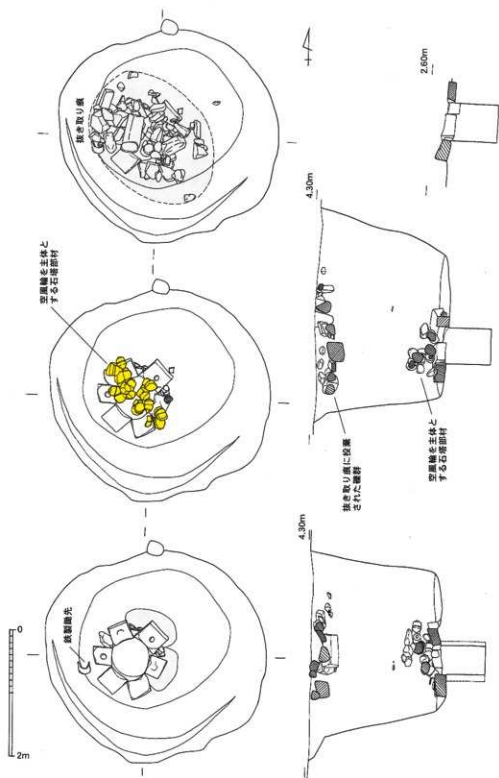
水溜部直上の石組みには、五輪塔の火輪や地輪・宝徳印塔の笠部の6個が転用されていた。これら転用石材の一边を弧状に加工し、花卉状に配置することで石組みを形成する。石組み内部には桶を1個体設置し、水溜部を形成していた。桶そのものは残存していなかったが、桶が設置されていた壁面に木質がわずかに残っていたり、枠板やタガの痕跡を認めることができた。さらに石組みが検出されたレベルでは水溜部に隣接して、楕円状の掘形を2箇所で見出すことができた。この掘形の内部には桶が設置されていた可能性が考えられ、水溜部についても数回(少なくとも3回?)に及ぶ改修が行われていたことが想定できる。また、この石組みの西側で、鉄製の鑄先が出土した。井戸の掘形の掘削に使用されたものであろう。この水溜部の石組みの上に、さらに凝灰岩の板石を六角形の形に数段積み上げる井筒の構造をもっていたと推定されるが、井筒を構成する石材は出土していない。井戸の廃棄時に抜き取りを行った可能性が高いと考えられる。

鉄製鑄先

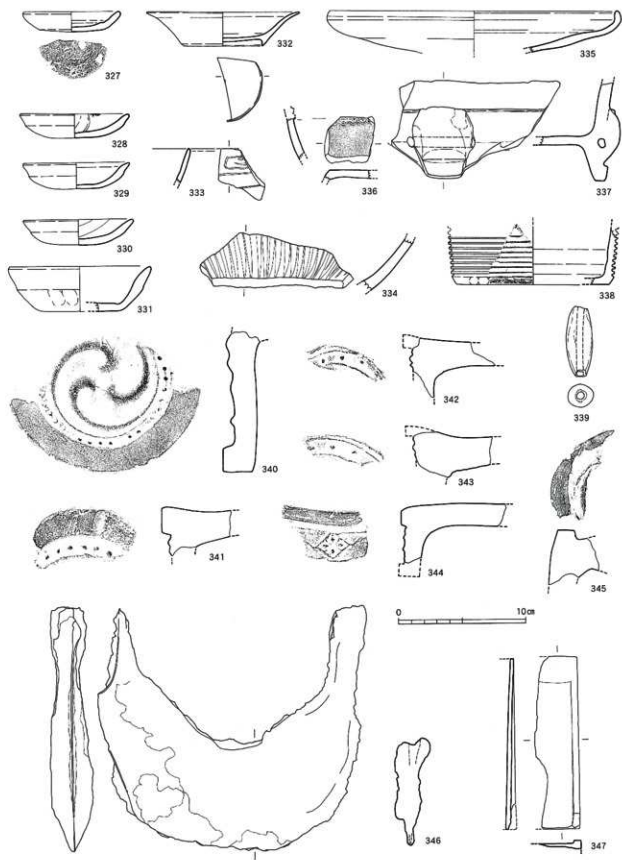
当該井戸の調査や掘り下げは冬季に行ったため、遺構底面や壁面からの湧水がなく、水溜部以下の断ち割りや石組みに使用された石塔部材などの取り上げが可能で、完掘することができた。

出土遺物は、第288～289図に示した。

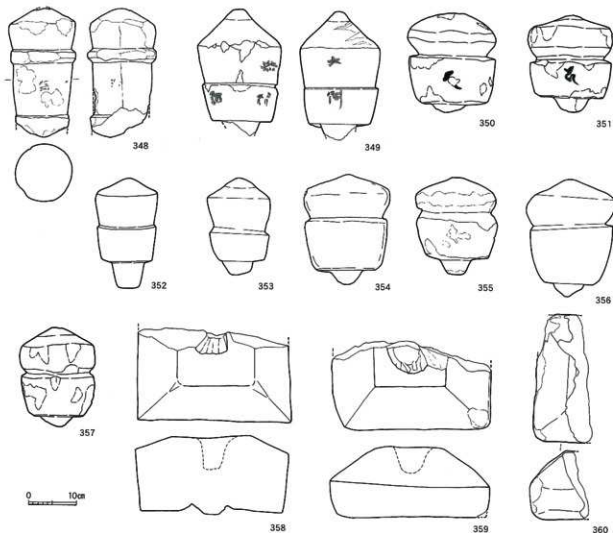
327は在地系のロクロ目土師器皿で、底部には糸切り痕が認められる。328～331は京都系土師器で、328～330は皿、331は深手の坏である。328の口縁部には、ススの付着が認められる。322は景徳鎮系の白磁皿で、外底部に呉須による裏底銘があるが、欠損のため判読できない。16世紀代の



第287図 SE173実測図(1/60)



第288図 SE173出土遺物①(1/3)



第289図 SE173出土遺物②(1/8)

瓦質土器
花瓶？

鉄製鋤先

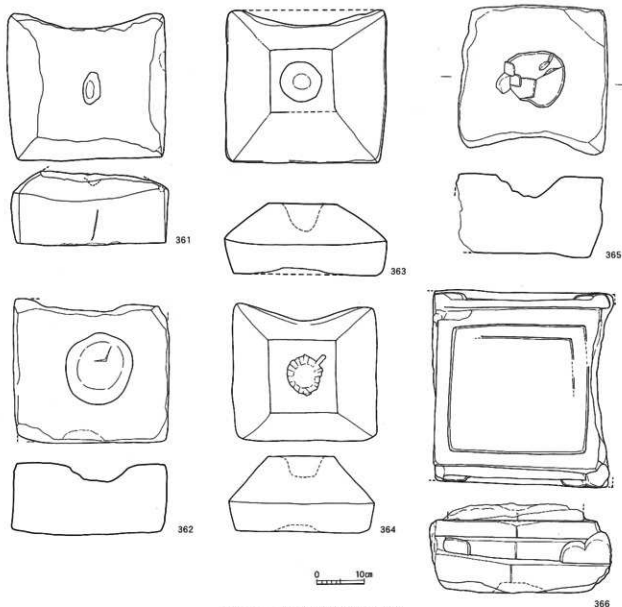
石塔部材の
一辺を弧状
に再加工

製品である。333は龍泉窯系青磁の雷文帯青磁碗で、15世紀代の製品。334も龍泉窯系青磁で、内面に鎮文をもつ大皿（盤）である。335は備前焼で、直立する口縁部をもつ鉢。326は瓦質土器で、断面形態が多角形をなす製品である。残存部の上縁に連続する刻印（スタンプ文）を施している。近年の調査で出土事例や報告例が増加しているが、完形品の出土に恵まれず、全形が不明である。花瓶などの形態に復元される可能性が考えられる。337は瓦質土器火鉢の脚部付近の破片である。

338も瓦質土器火鉢で、胴部外面に多条沈線を施す。339は管状土鍾の完形品である。340～343は軒丸瓦、344は軒平瓦である。345は道具瓦と思われる製品であるが、破片のため、どのような用途をもつ製品であるかは不明である。346は鉄製の鋤先で、井戸底面の石組の西側から出土した。井戸の掘削に使用されたものであろう。347は輝緑凝灰岩製の赤間硯である。

348～360は石塔類である。これらはすべて凝灰岩製で、「南無阿弥陀仏」の題目の一部や梵字の墨書が認められるものもある。348～357は底面付近にまとめて廃棄されたもの、358～360は抜き取り痕の埋土上位から出土した資料である。

361～366は水溜部の上に花卉状に配列されていた石塔部材で、井戸に転用するに当たって、いずれも石塔の一辺を弧状に再加工している。361・363・364は五輪塔の火輪、362・365は地輪、366は宝篋印塔の笠部である。



第290図 SE173出土遺物③(1/8)

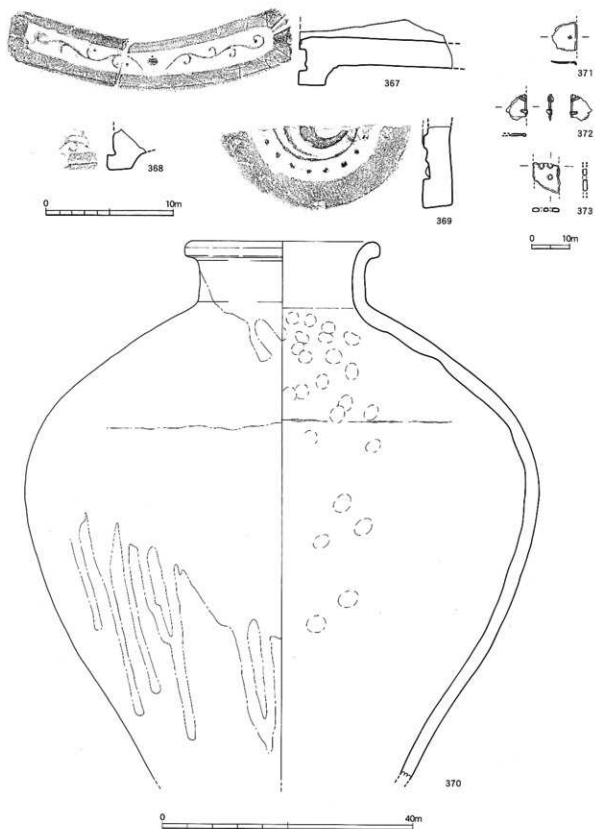
(6) 包含層・整地層

SX084・SX085

I9・J9～I11・J11区で検出された焼土層で、南北17.5m以上、東西5.4mの範囲に広がる一連の同一遺構であったが、島津侵攻後に構築された名ヶ小路の北側溝SD037によって南北に分断されている。南側をSX084、北側をSX085と呼称する。焼土層は南側の第48次調査区にも広がり、さらに南の第12次調査区にも分布していたと推定される。

焼土層は第2南北街路を構成する整地層群のひとつともなっており、最も厚い部分では層厚約30cmを測る。そして、街路東側に隣接する堀SD101に向かって緩やかに落ち込んでゆく堆積状況を見せる。焼土中には陶磁器や土器などの遺物、礫を多量に含んでいる。周辺の遺構の状況や出土遺物の様相から、SX084・SX085は天正14年（1586）12月の島津侵攻時の焼土層に比定される。これらの焼土層は、これまでの中世大友府内町跡の発掘調査で検出されたものの中でも、最も層厚が厚く、良好な状態で堆積しているものである。

天正14年
(1586)
12月
島津侵攻時
の焼土層



第291図 SX084出土遺物(1/3)

SX084
出土遺物
信楽焼

第291図は、SX084からの出土遺物である。367・368は宝珠唐草文軒平瓦で、367は瓦当文様が完存する。369は軒丸瓦の破片で巴文と珠文が見られる。370は信楽焼大壺で、外面に自然釉の流れが見られるとともに、内面には指頭痕が多く認められる。371～373は、焼土層をフルイがけして検出された鉄製品である。371・372は用途不明の鉄製品、373は小札である。

SX085
出土遺物

第292～297図は、SX085からの出土遺物である。

374～391は景徳鎮系青花である。374～377は小野分類E群青花碗で、376の内底部には一重方形枠内に「福」銘がある。378は外反する口縁部をもち、外面に毛彫りによる花唐草文が認められる碗である。口縁内面には呉須で四方博文が描かれている。379は小野分類B1群青花皿、380～385はE群青花皿である。このうち、382には「大明宣徳年製」の裏底銘があり、384・385はやや大型の製品である。386・387は外反する口縁部をもつ小皿で、口縁外面に呉須による圏線を一条描いている。388は小野分類F群青花皿で、口縁内面に桃文や宝文、外面に小花と七宝の繋ぎ文などを描く。389は小杯である。

元青花
梅瓶

390は香炉で、脚部を欠損する。口縁上部の平坦面に満堂文を描き、内面は露胎となる。391は注目すべき資料で、元青花梅瓶の破片である。肩部付近を文様帯とし、呉須による圏線内に唐草文を描く。内面は露胎となる。14世紀後半の所産である。392～394は漳州窯系青花の製品で、392は碗、393・394は皿である。394の見込みは蛇の目状に軸刺ぎとなる。395～397は青磁の香炉。このうち、395・396はそのサイズから「聞香炉」としても使えるような大きさである。398・399は

朝鮮王朝
産白磁壺
・白磁碗
・白磁皿

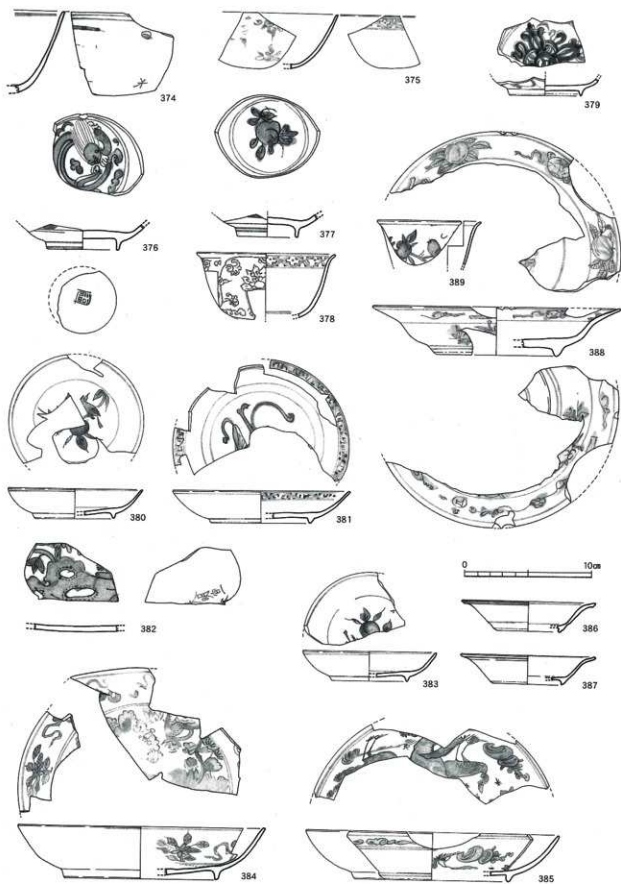
朝鮮王朝陶磁の白磁壺で口縁部と底部が接合しないが、同一體と考えられる資料である。400は見込みで段（鏡）を有する白磁碗で、器形の特徴から、朝鮮王朝陶磁の白磁碗と考えられる。401～409は景徳鎮系の白磁で、皿（400～408）と碗（409）が出土している。409の碗は内面に型打ち（印花）による文様が認められる。410・411は口縁部が屈曲し、端部をつまみ上げる形態をもつ白磁皿で、これも器形の特徴から、朝鮮王朝陶磁の製品である。412・413は華南三彩。412は小動物（果鼠？）を象った把手で、目の表現なども認められる。瓜形水注などの把手であろう。413も水注類の胴部破片と思われる。外面に把手が付いていた痕跡が認められる。414～416は中国陶磁の陶器で、414は壺の口縁部、415は小型の鉢、416は壺の把手である。417・418は朝鮮王朝陶磁の象嵌陶器の皿で、15世紀代の製品。混入品である可能性が高い。419は朝鮮王朝陶磁の白磁皿で、見込みに目跡と段（鏡）を有する。420～434は朝鮮王朝陶磁の陶器である。420～428は灰青沙器碗で、見込みや高台端部に重ね焼きの痕跡が認められる。429は片口鉢の口縁部の小片である。430～434は舟徳利で、430・431の内面には、同心円叩きが顕著に認められる。

華南三彩

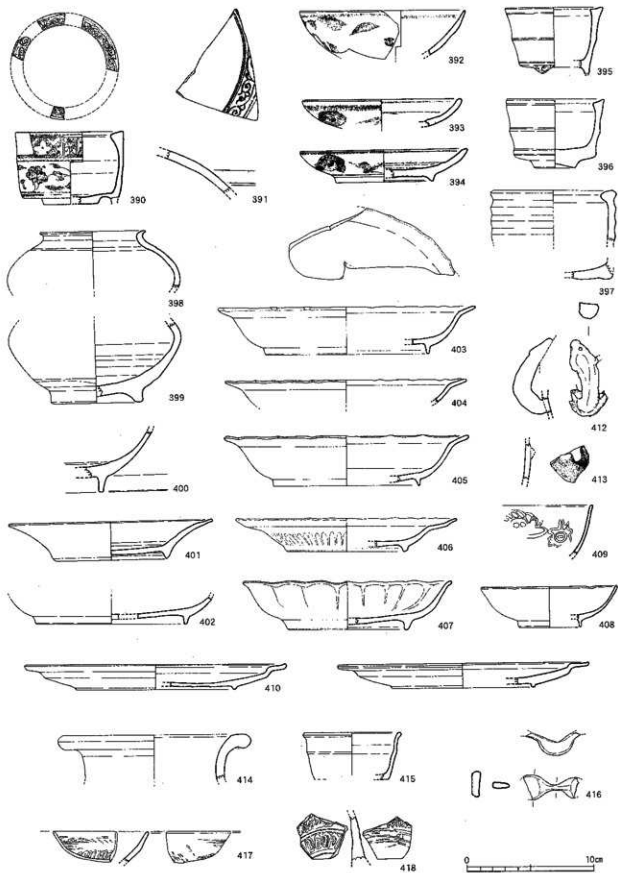
435～439は京都系土師器皿で、438は器壁が薄く、古い様相を持つ資料である一方、439は器壁が厚く、新しい様相を有する資料である。440は在地系の土師質土器皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。441は瓦質土器の小型の香炉で、外面に刻印（スタンプ文）などは認められず、無文となる。在地系の製品であろう。442は土師質土器で、直立する口縁部をもち、を平面形態が楕円状となる製品である。製水入れとして使われた資料であろう。443は瓦質土器の風炉の脚部で、内部が中空となる。底面には貫通する小孔があり、底部との接合面には接合を強固にするため、沈線が施されている。444・445は瓦質土器火鉢の口縁部で、444は低い2条の突帯間に二連雷文の刻印（スタンプ文）が認められるもの、445は外面が無文となるものである。いずれも在地系の製品である。

備前焼

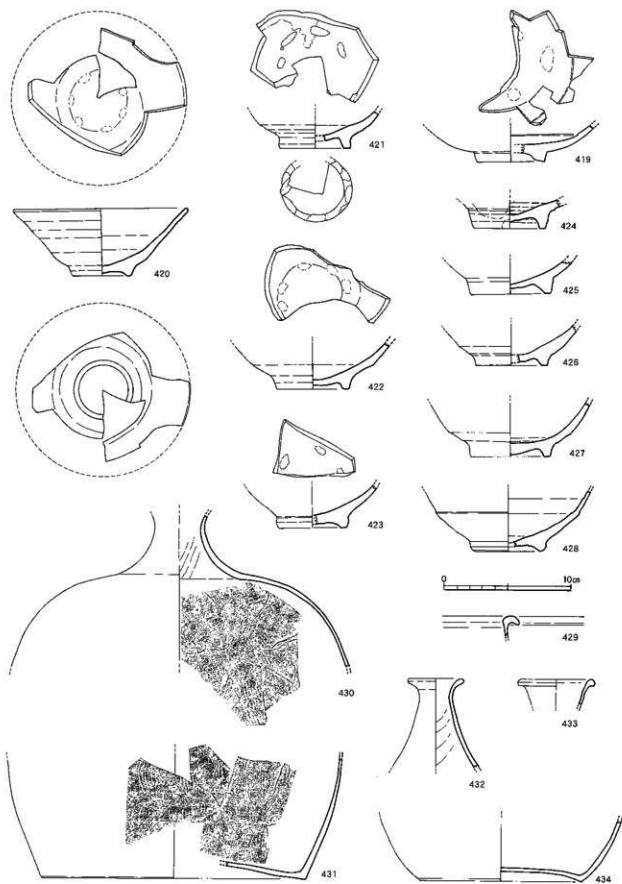
446～461は備前焼である。446・447は播鉢で、内面の播目は放射状播目と斜め播目を交差させる特徴をもつ近世1期の製品である。448・449は壺で、いずれも肩部には把手が付いていた痕跡がある。また、448の胴部にはへら記号が認められる。450～453は鉢。452の口縁部外面にはへら記号が認められる。454は最大径が肩部にあり、口縁部が「く」の字状に屈曲する壺である。口縁内面には蓋受けのための段を有する。455は直立する短い口縁部を有する小壺、457は片口となる



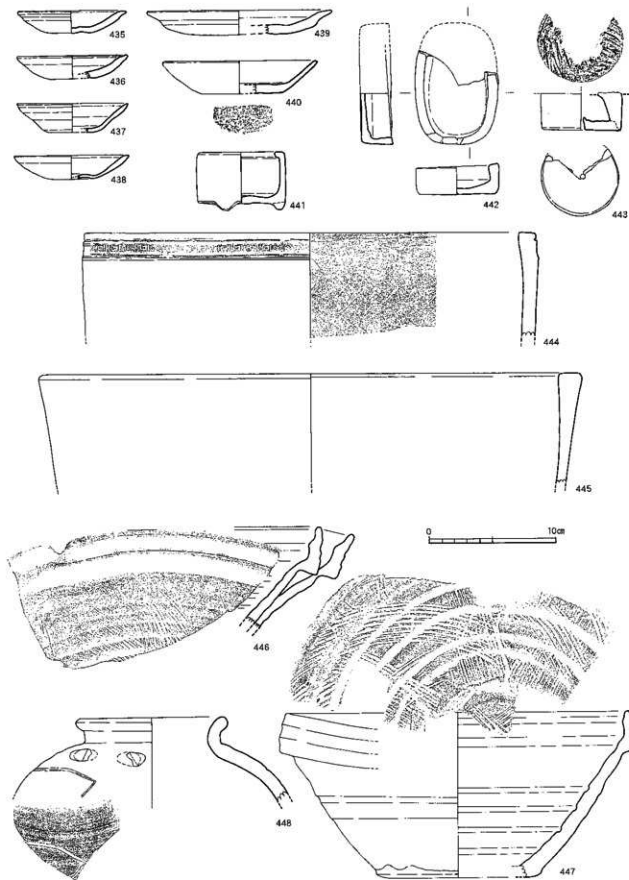
第292図 SX085出土遺物①(1/3)



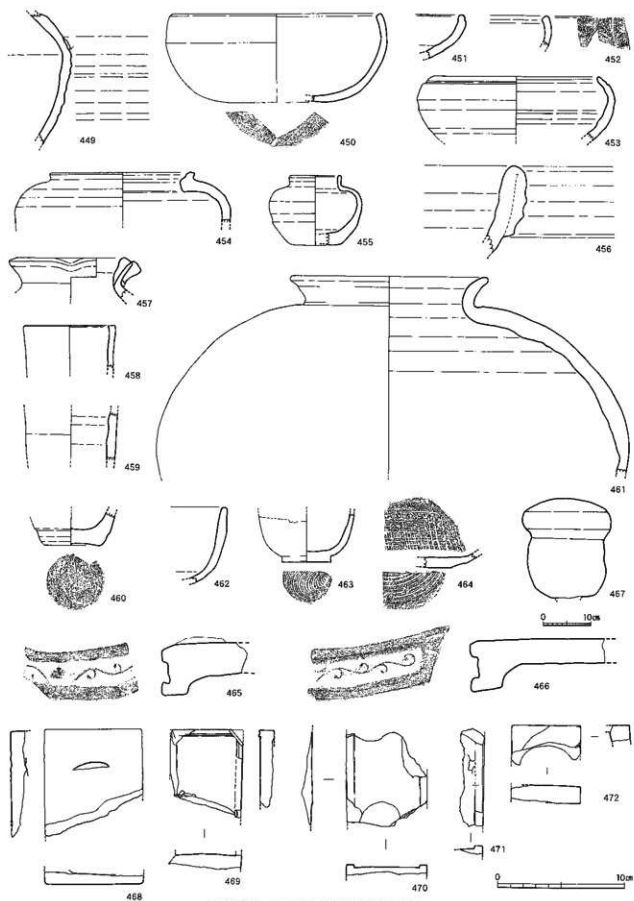
第293図 SX085出土遺物②(1/3)



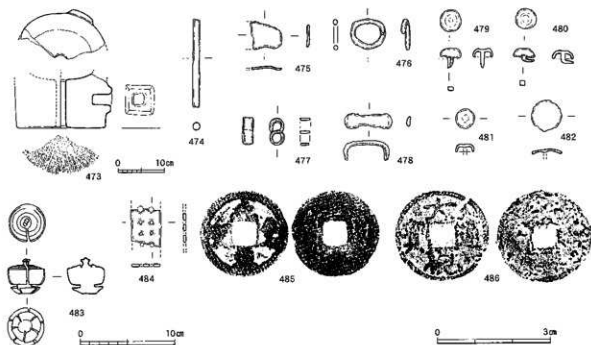
第294図 SX085出土遺物③(1/3)



第295図 SX085出土遺物④(1/3)



第296図 SX085出土遺物⑤(1/3, 1/8)



第297図 SX085出土遺物⑥(1/2, 1/8, 1/1)

口縁部をもつ壺である。458・459は筒状の胴部をもつ梅花入であろう。460は小型の蓋の底部で、底部外面には糸切り痕が認められる。461は大型の壺で、胴部中心に最大径をもち、ラッパ状に開く口縁部を有する。462～464は瀬戸美濃系の陶器で、462は碗、463は底部外面に糸切り痕のある小型の壺、464は銅皿の底部である。464は14～15世紀代の所産であるため、混入品であろう。465・466は宝珠唐草文軒平瓦の破片である。

467～473は石製品。467は凝灰岩製の空風輪、468～472は麻緑凝灰岩製の赤間環、473は和泉砂岩製の茶臼の上臼である。474～484は銅製品であるが、小札である484を除くと、いずれも用途不明である。485・486は銅銭で、485は初鑄造年1078年の北宋銭「元豊通寶」、486は初鑄造年1107年の北宋銭「大観通寶」である。

石製品・
銅製品・
銅銭

近世整地層

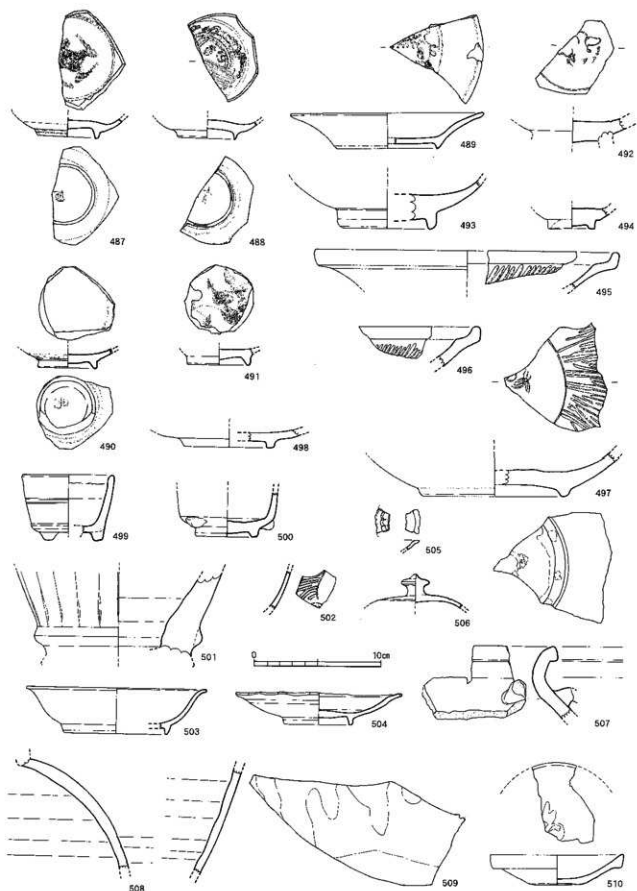
すでに報告した礎石建物1～3は、後述する「大規模施設」段階（1570年代～1587年）の塚SD100・SD100を完全に埋設した上面に構築されている。これらの礎石建物の構築に伴う整地層を「近世整地層」と呼称する。当該整地層からは多量の遺物が出土しており、以下でそれらを報告する。近世整地層はJ7～J10区およびK7～K10区に分布し、礎石建物の裏手に相当する地点（K7～K10区）には多量の礫が投げ込まれていた。出土遺物はおおむね16世紀後葉のものが主体となるが、志野焼や大黒IV期の製品など、1590年代以降の遺物が少量含まれる。

志野焼
1590年代の
遺物を含む

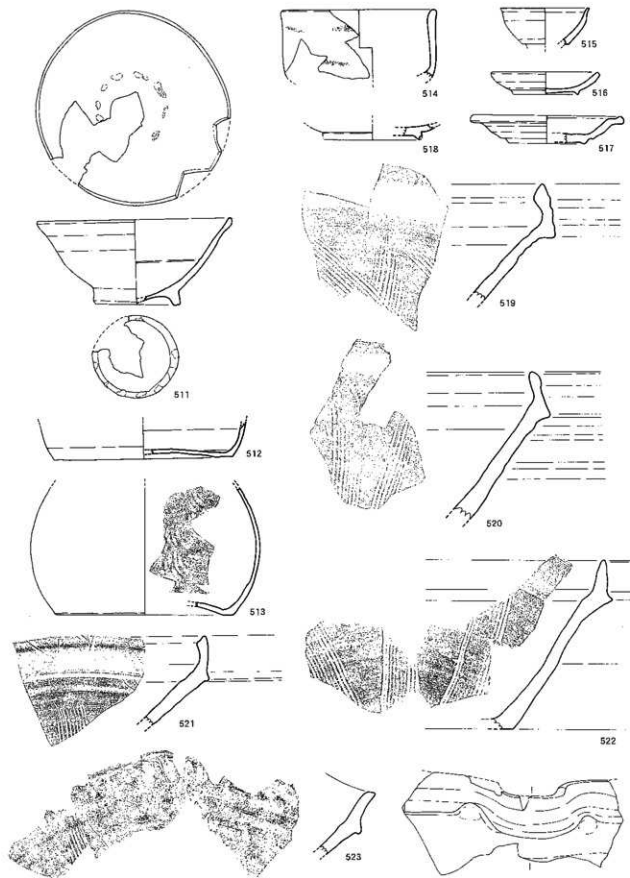
出土遺物は、第298～310図に示した。

487～489は景徳鎮系青花で、487・488は小野分類E群青花碗（腹頂心碗）、489は口縁部が外反する青花皿である。487の内底部には異体字、489の内底部には「上品□□」の裏底銘がある。490・491は瀬州窯系青花碗で、490の内底部には文字または記号が朱墨によって入れられている。491は高台周辺が残存する製品で、二次加工によって意図的に整形されたものである可能性がある。492

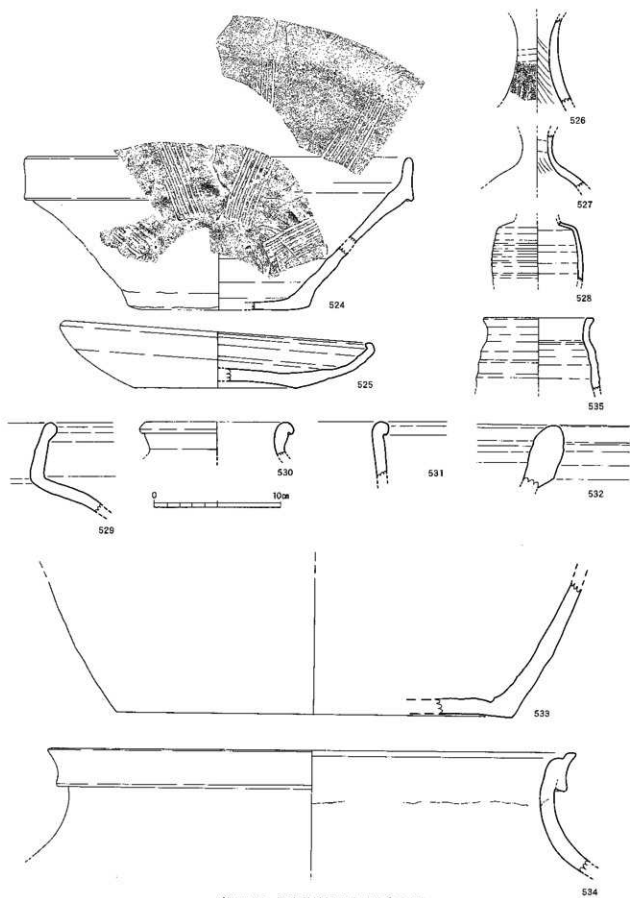
朱墨による
文字または
記号



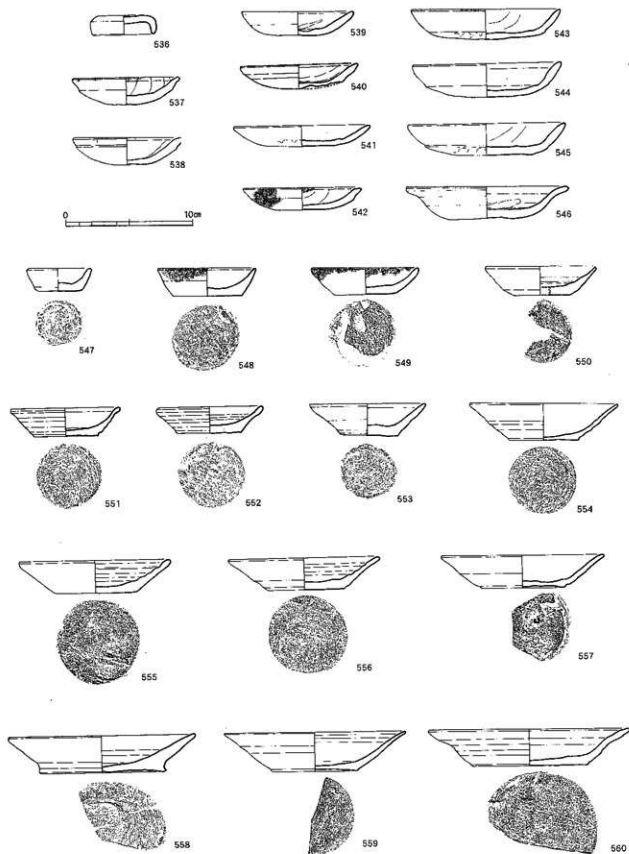
第298図 近世整地層出土遺物①(1/3)



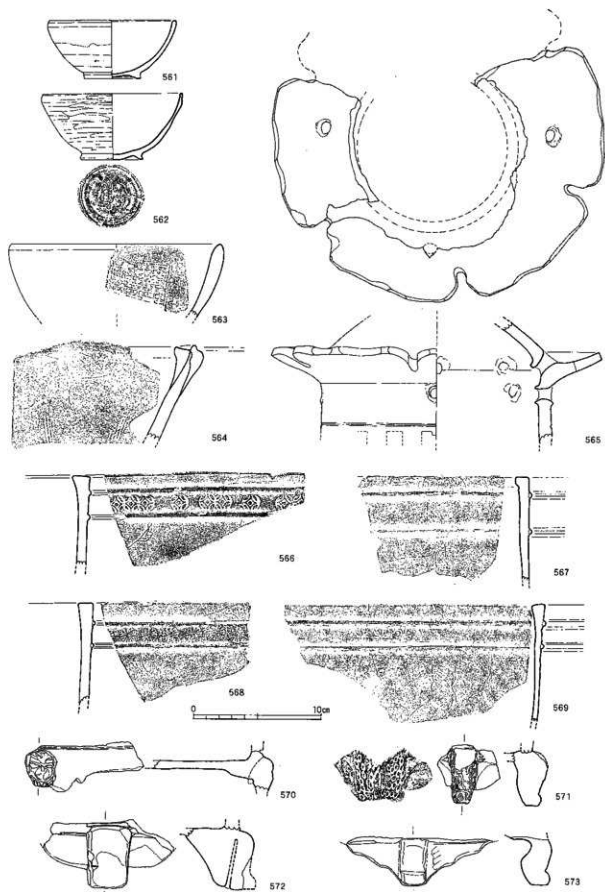
第299図 近世整地層出土遺物②(1/3)



第300図 近世整地層出土遺物③(1/3)



第301図 近世整地層出土遺物④(1/3)



第302図 近世整地層出土遺物⑤(1/3)

～501は中国陶磁の青磁である。492～494は青磁碗の底部で、492の見込みには刻印による文様が認められる。495～497は青磁の壺（大皿）で、屈曲しながら直立する口縁部を有し、胴部内面に銘文がある。また、495の内面には刻印による文様が施されている。498は青磁皿の底部と思われる。499・500は香炉で、小型のサイズであることから「閑香炉」としても使える大きさである。501は大型の瓶で、底部付近の破片である。高台部と胴部の境に突帯をもつのは、15世紀代の特徴である。502～504は中国産の白磁。502は碗の胴部と思われる破片で、外面に毛彫りによる文様をもつ。503は森田分類E群の白磁皿。504は口縁部が輪花となる製品である。505は青釉陶器小皿の破片で、口縁部が細かい輪花となっている。506は褐釉陶器合子の蓋で、天井部には宝珠状のツマミを有する。内面は露胎となる。507～509は褐釉陶器の壺である。510は蓋状の形態をなす陶器で、内面と口縁部外面に黒褐釉を施し、見込みには鉄絵による「福」字を描く。胴部外面から底部にかけては露胎となる。大友府内町跡第94次調査^{註(1)}で口縁部にスガが付着する資料が出し、灯明皿として製作・使用されたものである可能性が高いことが判明した。

高台部と
胴部の境
の突帯

陶器灯明皿

511は朝鮮王朝陶磁の灰青沙器碗で、見込みと高台壘付部に目跡が残存する。512・513は朝鮮王朝陶磁の青磁利での底部から胴部の破片である。胴部内面には同心円叩きか認められる。514は志野焼の碗で、1590年代以降の製品である。515～518は瀬戸美濃系の陶器で、515は小型の天目碗、516・517は皿である。516の器表面は二次的な使用によって荒れており、灯明皿として転用された可能性がある。517は折縁皿で、器高が低いことから、大濠IV期（1590～1600年代）に比定される。518は緑釉陶器皿の底部付近の破片である。8～9世紀代に比定される資料であることから、混入品であろう。

志野焼

大濠IV期
(1587～1600
年代)の折縁
皿

519～533は備前焼である。519～524は播鉢で、519は近世1期（16世紀末葉）、520は中世6期（16世紀前葉～後葉）、521～524は中世5期（15世紀後葉）に比定される。525は鉢で、焼け歪みがみられる。526・527は瓶（徳利）で、526には外面にヘラ記号が認められる。528は小型の壺の胴部で、外面にロクロ目による凹凸が目立つ。529～531は壺の口縁部、532は大壺の口縁部、533は大壺の底部である。534は常滑焼の大壺である。535は筒状の胴部とわずかに外反する口縁部をもつ小型の壺である。備前焼とも考えたが、その器形や胎土に半透明の鉱物粒子が目立つことから、中国陶磁のものと考えられる。

土師質土器

536は手捏ね整形による土師質土器で、焼塩壺の蓋あるいは小皿と考えられるものである。537～546は京都系土師器の皿で、スガが付着するものとそれが認められないものがある。前者は灯明皿として、後者は食器として使用されたものであろう。547～560は在地系の土師質土器皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。このうち550～552・555・556・559・560などは胴部にロクロ目を顕著に残すロクロ目土師器皿である。また、558は底部がやや外側に張り出し、直線的に外傾する口縁部をもつ。類例が大友府内町跡第13次調査SX706から、京都系土師器と伴って出土しており^{註(2)}、16世紀後葉から末葉の所産であろう。

瓦質土器

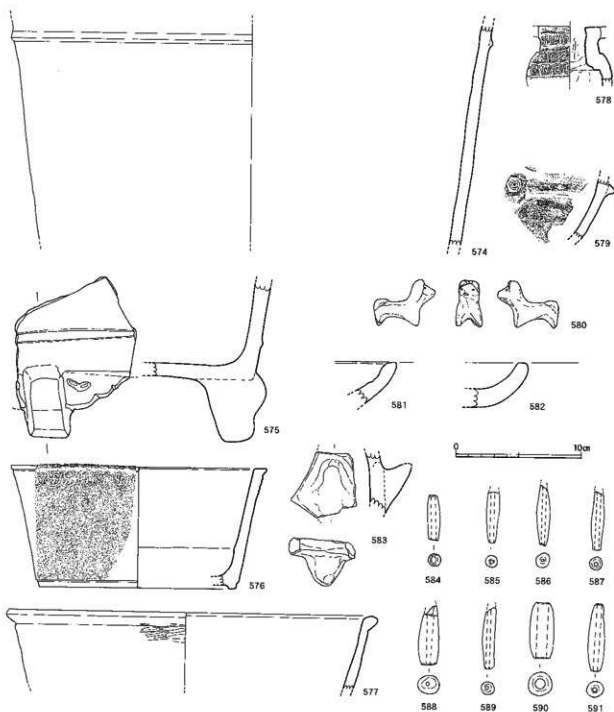
561～579は瓦質土器の製品である。561・562は碗で、16世紀代に盛行する在地系の製品。563は内面に格子状の沈線を施す銅皿である。564は鍵状に短く屈曲する口縁部を有する播鉢である。内面には4条を一単位とする播目が認められる。565は灯籠で、大友府内町跡第29次調査SE065（16世紀後葉～末葉）^{註(3)}に類例がある。566～569は長胴形火鉢の口縁部で、2条突帯間に刻印（スタンプ文）が認められる。570～573は火鉢の脚部で、570は仮面文、571は襷を象った形態を呈している。

註 (1) 大分市教育委員会「中世大友府内町跡第94次調査」(『大分市市内遺跡調査報告』2009・2010年一) 2011年

(2) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「豊後府内2 中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査Ⅱ」(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年) 第334頁25～28、197頁

(3) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「豊後府内12 中世大友府内町跡第29・35・42・68次調査Ⅱ」

(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第41集 2005年) 第4・129頁15、206頁

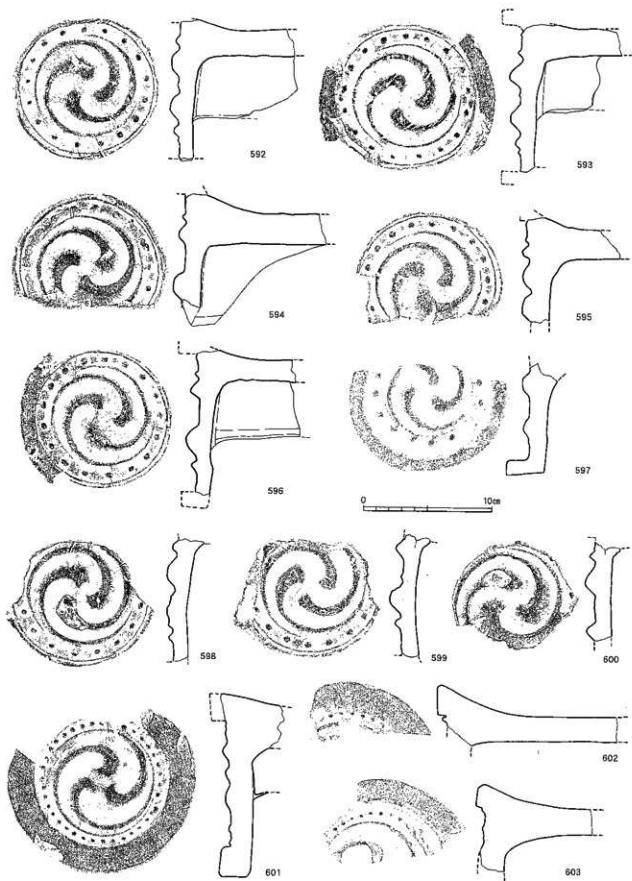


第303図 近世整地層出土遺物⑧(1/3)

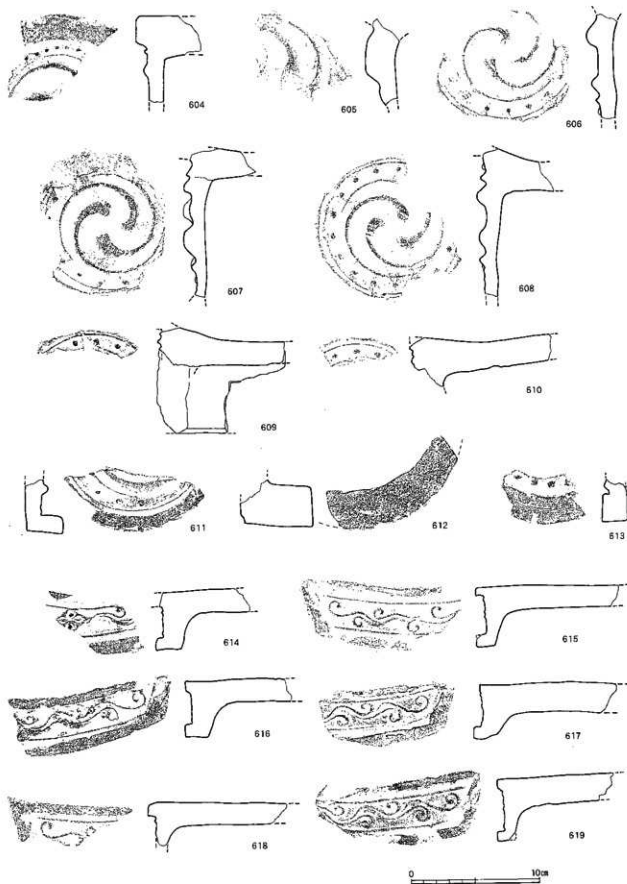
574・575は長胴形の火鉢で、その形態から15世紀代に遡る資料である可能性が高い。576は鉢で、口縁外面に巴文の刻印（スタンプ文）が認められる。577も鉢の口縁部である。578は器種不明であるが、外面に雷文の刻印（スタンプ文）を施す脚部である。579も器種不明であるが、断面三角形の突帯を一部変形させて、六角形状の刻印（スタンプ文）を押捺している。

580は犬形土製品の完存品で、中型のサイズに属するものである。胎土は淡褐色を呈し、精選された精良な粘土が使用されている。581・582は取瓢の口縁部である。583は土師器製の把手部付近の

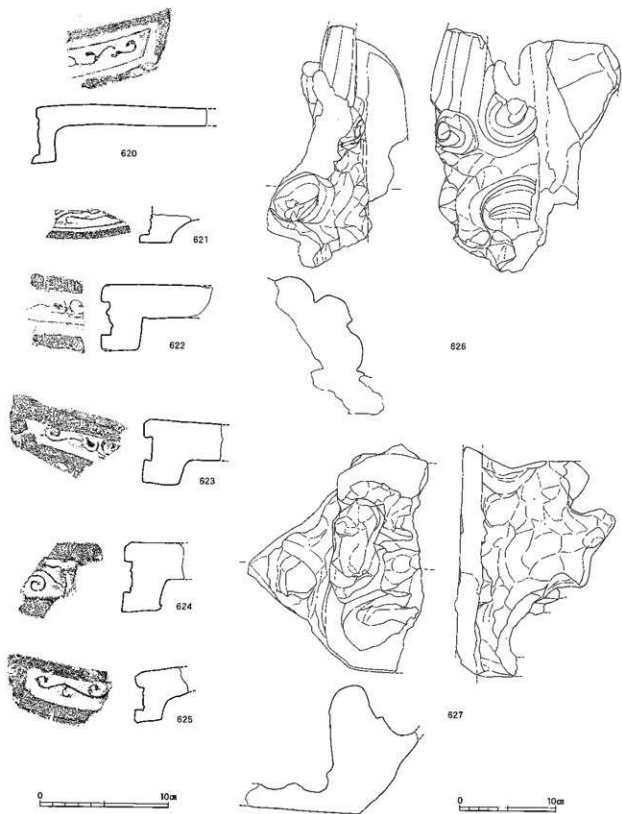
- 破片である。8～9世紀代の所産で、混入品であろう。584～591は管状土鍾である。
- 軒丸瓦** 592～603は軒丸瓦で、瓦当文様はいずれも巴文である。軒丸瓦は分類が不十分であるが、少なくとも数種類以上の文様が認められるようである。例えば、瓦当面が完存するか全形がうかがえる資料をみると、592・593は右回りの巴文で珠文数が17、601は右回りの巴文で珠文数が36となる。しかしながら、今のところそれらの製作年代を判断する手がかりが少ない。612は巴文をもつ瓦当の周縁部であると推定されるが、他と比較してやや大型であり、周縁の幅と高さが大きいことから、鳥雲瓦などの一部である可能性が考えられる資料である。
- 軒平瓦** 614～625は軒平瓦。このうち、614～619は称名寺の創建瓦と推定される菱形唐草文軒平瓦（14世紀前葉）である。620はこれらとは異なる菱形唐草文軒平瓦（14～15世紀？）、621は変形菱形唐草文軒平瓦（14世紀前葉～中葉？）、622・623は蓮華唐草文軒平瓦（15世紀？）、624は622とは異なる蓮華唐草文軒平瓦（15世紀？）、625は宝珠唐草文軒平瓦（16世紀後葉）である。
- 626・627は鬼瓦で、このうち626については角、肩（？）などの表現がみられる。
- 628～632も鬼瓦と思われる資料で、周縁部の内側に円筒状の突起（珠文）が貼り付けられている。このような形態の鬼瓦は、他の調査区でも破片の出土事例は増えているが、完形品や全形をうかがえる資料に恵まれていない。
- 丸瓦・平瓦** 633・634は丸瓦で、いずれも凸面に縄目叩き、凹面に糸切り痕（コビキA）が認められる。633は丸瓦部の全長が約30cmで、凹面には糸切り痕とともに吊り紐痕が認められる。635は平瓦で、凸面に縦方向の調整痕、凹面に糸切り痕（コビキA）が認められる。また、断面の形態や側面などの状況から、整形台の使用の痕跡が認められる資料である。
- 石塔部材** 636～667は石塔の部材で、いずれも凝灰岩を素材とする。636～662は空風輪で、墨書で梵字が描かれている資料（638）も存在する。664・665は水輪、663は地輪で、665には径約5cm、深さ約2cmほどの窪みが設けられている。666・667も凝灰岩の石塔部材で、蓮弁や返花・受花などの表現が認められる。無縫塔などの一部であった可能性が考えられる。
- 石臼・茶臼** 668～670は安山岩を素材とする石臼、671～675は和泉砂岩を素材とする茶臼である。茶臼については、671は把手を差し込むための挿入部を設けている上臼、672・674・675は下臼、673は小片のため不明である。676・677は黒色粘板岩を素材とする硯で、677については砥石に転用されており、長方形に再加工がなされている。豊後府内で出土する硯の大半は輝緑凝灰岩製の赤間硯であり、このような赤間硯とは明らかに異なる石材を使用した硯の出土は珍しいことであるが、現状では産地の特定ができていない。678は輝緑凝灰岩製の赤間硯で、残存する陸の部位に墨の付着が認められる。
- 砥石・滑石・フイゴ羽口** 679～684は砥石である。681・682は滑石を素材とするもので、石鍋などの再加工品であろう。特に682については略長方形に再加工を行う意図がうかがえ、湿石などに使用されたものである可能性がある。685は凝灰岩で作られた石製のフイゴ羽口である。
- ガラス小玉・銅製品・鉛玉** 686はガラス小玉で、色調は青色を呈する。欠損する部位はなく、完形品である。687は小型の銅製品であるが、用途不明である。688は鉛玉（鉄砲玉）である。断面形態は球形を呈し、その一部に窪みがみられるが、これが発砲後に生じたものかどうかは判断がつかなかった。
- 銅銭** 689～697は銅銭である。保存状態が悪く、銭文などが判読不明のものが多く、初鋳造年などのデータについては巻末の遺物一覧表を参照されたい。



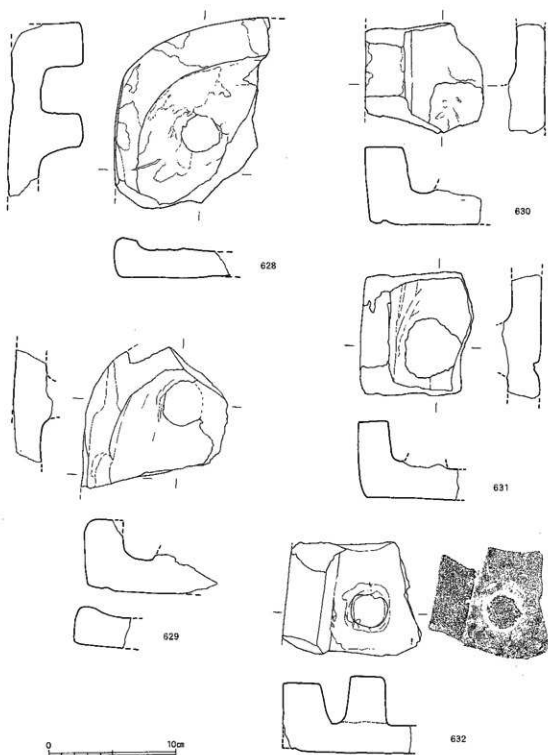
第304図 近世整地層出土遺物⑦(1/3)



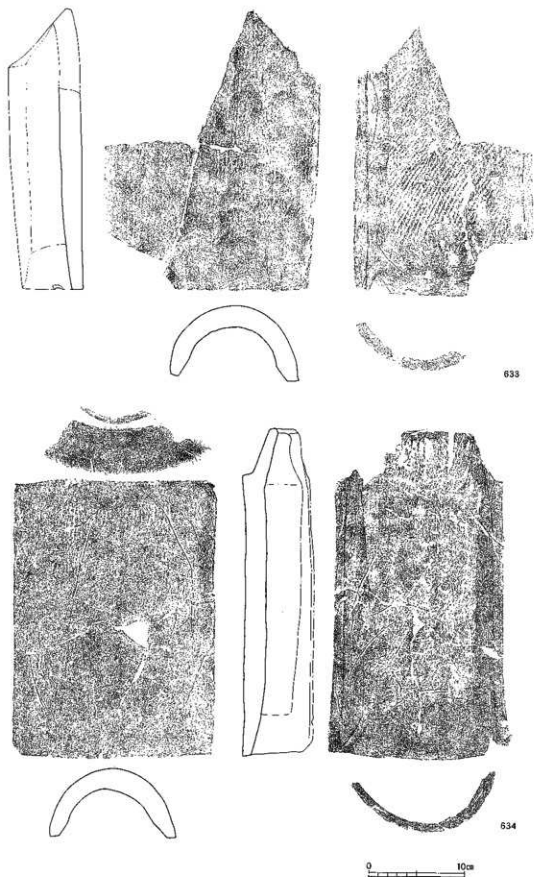
第305図 近世整地層出土遺物⑧(1/3)



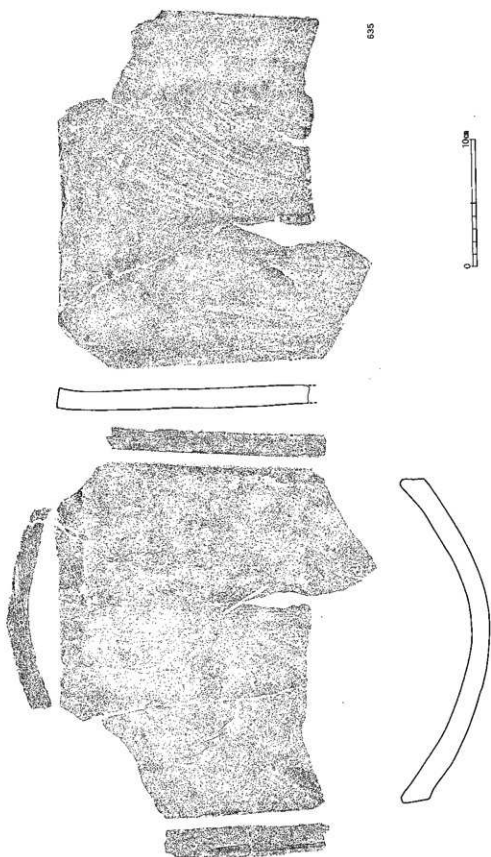
第306図 近世整地層出土遺物①(1/3)



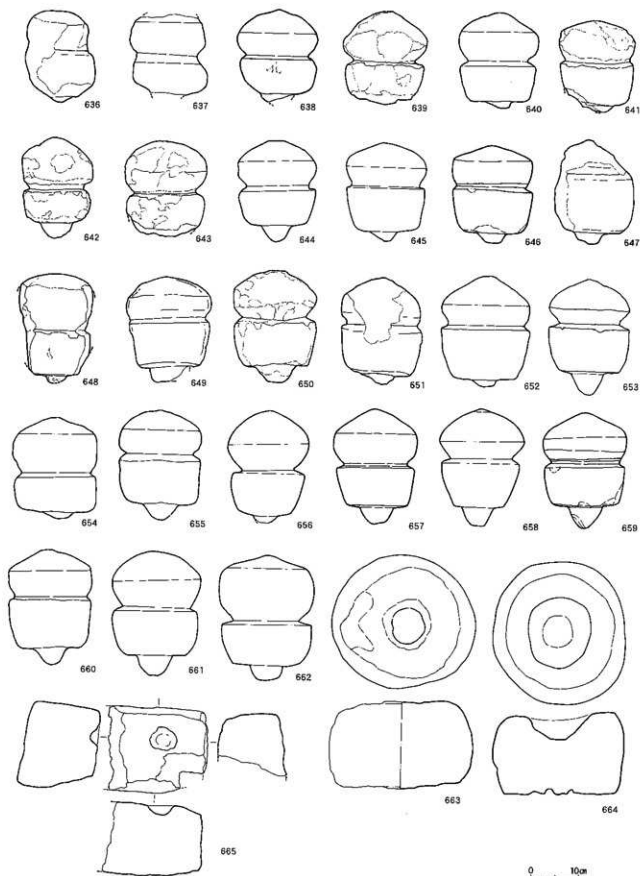
第307図 近世整地層出土遺物⑩(1/3)



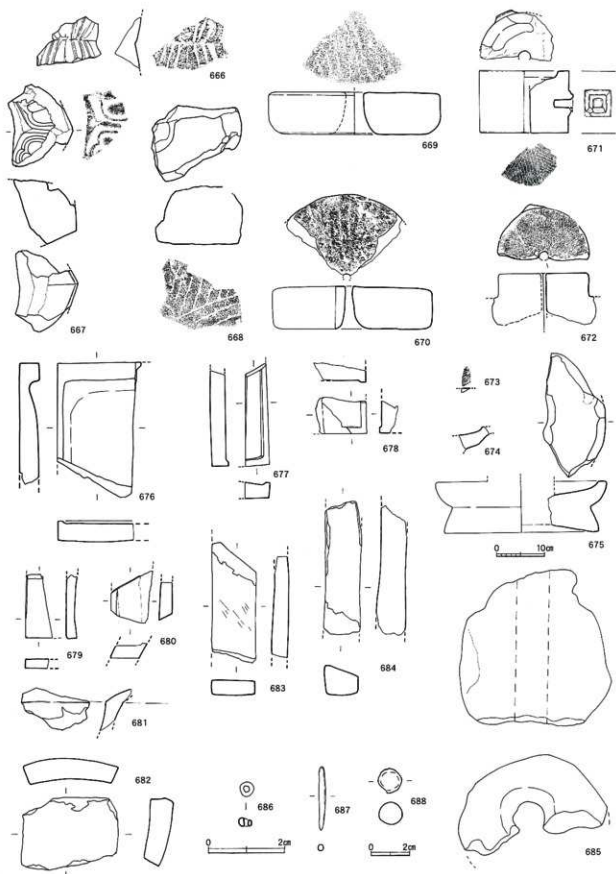
第308図 近世整地層出土遺物⑩(1/4)



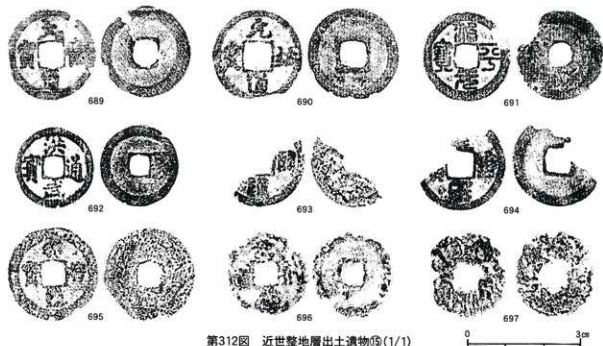
第309図 近世整地層出土遺物⑩(1/3)



第310図 近世整地層出土遺物③(1/8)



第311図 近世整地層出土遺物④(1/8, 1/3, 1/2, 1/1)



第312図 近世整地層出土遺物⑤(1/1)

その他の遺物

第313～317図に掲げた遺物は、表土中もしくは遺構検出中に出土したもので、それらをまとめて報告する。大半が「町屋」段階に相当するものであるが、近世・近代以降の遺物も存在する。

698～700は景徳鎮系青花で、698は小野分類E群青花碗、699はC群青花皿、700はB1群青花皿である。701は景徳鎮系白磁の小杯である。702は龍泉窯系青磁鉢の口縁部で、口縁の平面形態が多角形を呈する。内外面に片彫りによる文様が認められる。703も龍泉窯系青磁の瓶で、外面に片彫りによる文様があり、把手が剥落した痕跡がある。704～706は青釉陶器皿、707・708は華南三彩である。708は外面に型打ちによる羽毛状の文様が施されているが、当該部位には色釉が認められず、露胎となる。色釉は羽毛状の文様より上位に施されているようであるが、黒色に変色している。

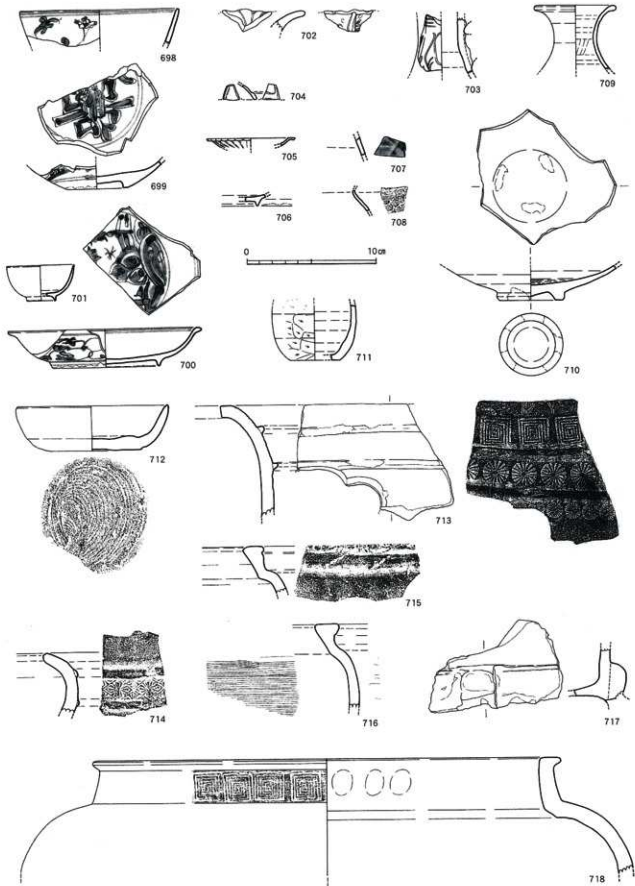
華南三彩

709・710は朝鮮王朝産陶磁で、709は舟徳利の口縁部、710は灰青沙器碗である。711は備前焼の小型の壺で、外面に削り調整がなされている。712は在地系の土師質土器坏で、底部外面に糸切り痕が認められる。14世紀代の所産である。713～724は瓦質土器である。715は内湾する口縁部を有する風炉で、胴部に透かし孔が認められる。残存部の外面に突帯があり、上から順に雷文・大型の菊花文・小型の菊花文の刻印を押捺している。714も内湾する口縁部を有する火鉢または風炉で、外面に2状の突帯と菱文の刻印が認められる。715・716は端部の上面が平坦面を形成し、直立する口縁部を有する火鉢で、在地系の製品である。717・719・720は火鉢の脚部付近の破片である。718は風炉または火鉢で、口縁部外面に刻印による大型の雷文を押捺している。721・722は播鉢である。723は香炉と思われるもので、口縁部外面に退化した菊花文の刻印が認められる。724は火鉢などの脚部と思われる破片で、外面に横方向の沈線が施されている。725は土鈴の上部で、紐を通すための貫通孔がある。726～731は管状土鍾、732・733は瓦質土器や瓦の再加工作品である。734～738は軒丸瓦、739～742は軒平瓦、743～745は鬼瓦、746は釘孔をもつ丸瓦片である。

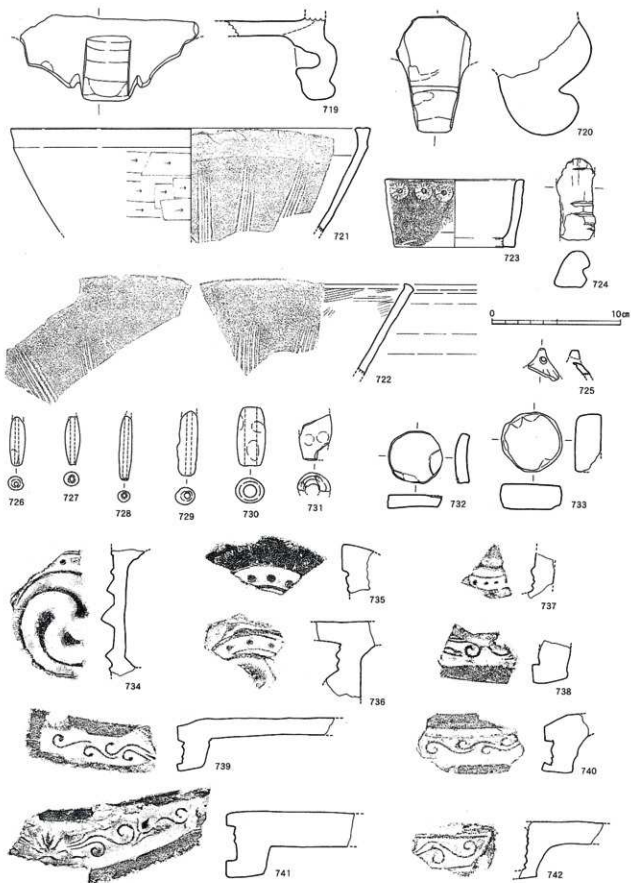
747・748は滑石製の製品で、石薬を再加加工したもの。温石などに使用されたものか。749は砂岩系の石材を使用した砥石である。750は輝緑凝灰岩製の加工品で、赤間硯を砥石に転用するため、再加加工したものであろう。751は鉛片である。出土地点を原位置で押さえることができなかったが、L8区から出土した。豊後府内では特徴的な鉛製のメダイ（府内型メダイ）¹⁶⁾が出土することが知られ

鉛片

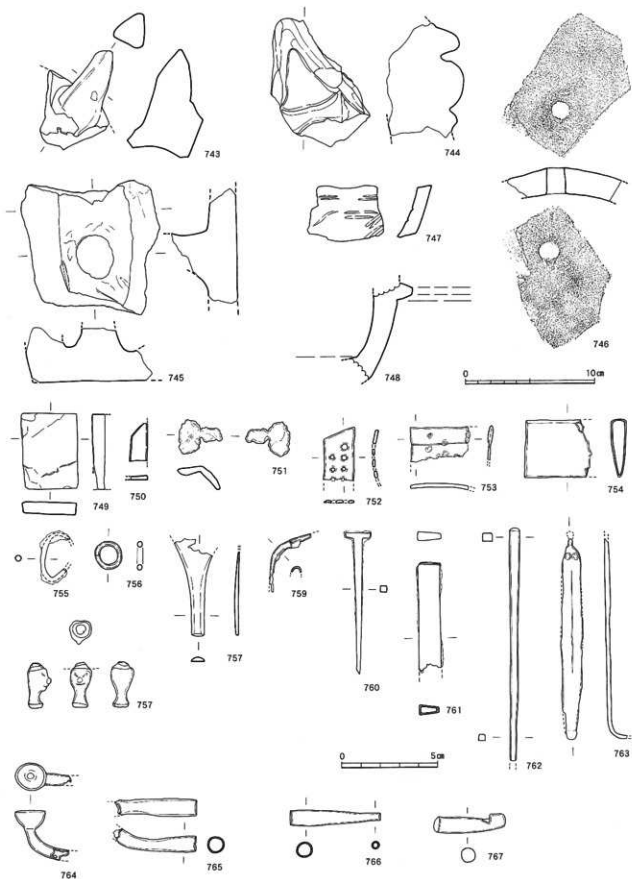
註 16) 後藤晃一「キリシタン遺物の考古学的研究」(『日本考古学』第32号) 2011年



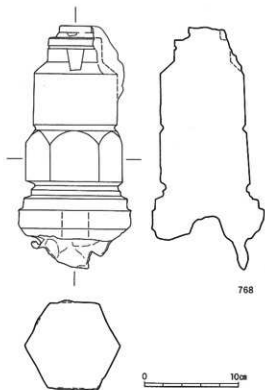
第313図 その他の遺物①(1/3)



第314図 その他の遺物②(1/3)



第315図 その他の遺物③(1/3, 1/2)

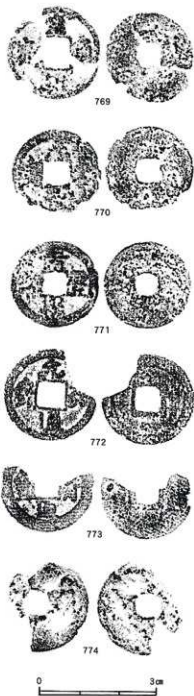


第316図 その他の遺物④(1/2)

ており、このような鉛製品を製作した後の残滓であった可能性がある。小片であり、必ずしも良好な出土状態とはいえないが、注意を払っておきたい遺物である。752・753は小札で、752は鉄製、753は銅製である。754は銅製品で用途不明、755・756は銅製の環である。757は銅製の脚部で、人面を象っている。金属製の香炉などの脚部であろう。758は銅製品であるが、用途不明。759は銅を素材とする鍮金具と思われ、胸板の覆輪の一部か。760は鉄釘、761は銅製の小柄、762は用途不明の棒状の鉄製品である。763は銅製の筭で、曲がった状態で出土した。764～766は銅製の煙管で、近世に降る遺物である。767は鉛製の沈子の破片。この種の沈子は江戸時代の後半期から出現することが知られており、大分市府内城三ノ丸北口跡[※]で堀から27個がまとまって出土している。768は焼夷弾の信管で、戦時中（1940～1945年頃）の遺物と思われる。J9区の第2南北街路に突き刺さった状態で出土した。769～774は銅銭である。銭種などのデータは巻末の遺物一覧表を参照されたい。

鉛製沈子

焼夷弾信管



第317図 その他の遺物⑤(1/1)

註 ⑤ 吉田寛『鉛製沈子について』（『府内城三ノ丸北口跡』大分県教育委員会 1996年）92～95頁